



惠日山金剛禪寺者。始波多野中務忠經。爲鎌倉右府將軍實朝公菩提。建長二庚戌年。建立相州波多野莊田原村。後江戸下野入道道心。移寺於武州江戸莊小日向鄉金杉村。亦其後文明年中太田左衛門入道靜勝軒春苑道灌。重興焉。昔日者臨濟宗也。其時之開山普應國師。二代巨舟和尚。中興叔悅禪師。永正六己巳年改曹洞宗者也。維時永正十癸酉年七月十日。金剛現住比丘實山叟記之。

金剛寺殿鎌倉右府將軍實朝公大禪定門

承久元己卯年正月二十七日

地藏堂

同じ山の頂にあり。本尊は天竺佛にして、頼朝卿鎌倉圓覺寺の後に安置ありしを、實朝公の時、波多野に一字を建立ありて、彼地に移し奉りしを、後金剛寺と共に此地に轉じたりといへり。

當寺は波多野中務忠經

東鑑に、中務丞忠綱と云ふ名あり。諸家系圖に依て考ふるに、波多野中務丞從五位下忠綱後に忠經に改むるとあり。

鎌倉將軍實朝公の菩提を弔

はんが爲、建長二年庚戌、相州波多野莊田原邑に造立せし所の精舎にして、

其のちえ、しもつけに、

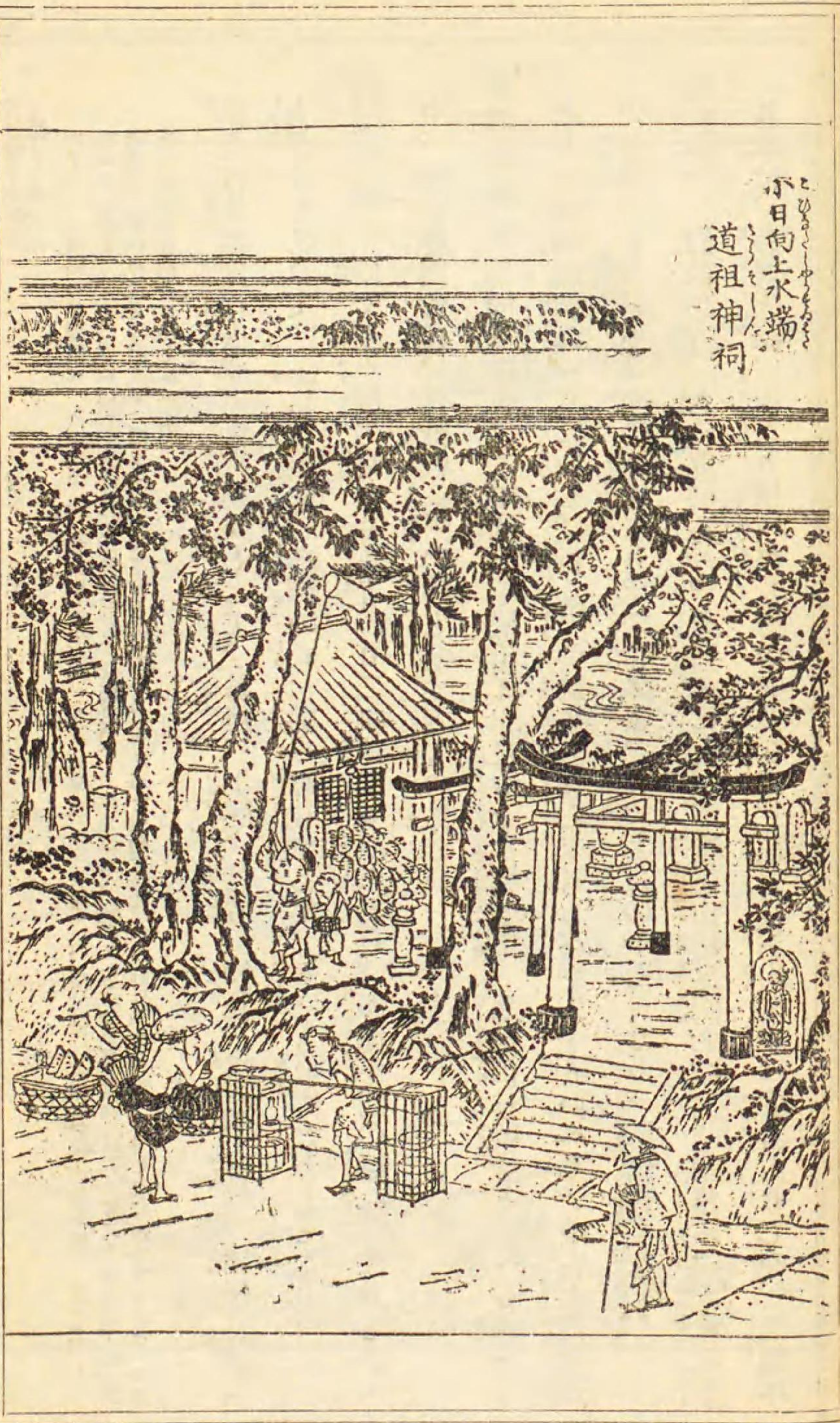
道心佛、今の地に遷せしといふ。又文明年間、太田道灌當寺を重修し、叔悅禪師をして住持

たらしむ。梅花無盡藏傳長老の註に、叔悅禪師は道灌の伯父なりと云々。故に、實朝公、及び道灌の靈牌、ならびに肖像等を置く。

總門の額に、慧日山と書せしは、

白石先生云く、梅花無盡藏文明十七年乙巳東遊の詩の註に、芳林院において李太白の墨蹟を見る、同じく其下に

小日向土水端
道祖神祠



芳林院今金剛寺と號すとあり。

按ずるに北條家の分限帳に、島津孫四郎、北品川、小石川、及び金曾木(カナンギ)内、法林院、金剛寺分等の地を領する由を記して法林院に作る。又小田原實記に、大永四年正月十三日、北條氏綱、上杉修理太夫朝興とたゝかひ勝して、江戸の城にうつる條下に、其頃當所芳林院の孤舟和尚來りて萬里居士の江亭記を捧ぐると。また孤舟和尚其後は金剛院に住すと記せり。これに因て考ふれば、金剛寺と法林院は別なる事しるべし。

當寺往古は境内廣く、寺院巍々として、首座、主閣、侍者、沙彌、喝食、維那、納所、行者、火番などありて、祈禱、上堂、參禪の式、勤め怠らずして、堂塔も壯麗たりしとなり。

道祖神祠 同く上水堀の端、金剛寺より二町ばかり西にあり。明德年間の勸請なりといへり。別當龍門寺に、當社勸請の碑と稱するものあり。

氷川明神祠 同西の方、二町餘りを隔て、是も上水堀の端、慈照山日輪寺といへる禪林にあり。祭神は當國一宮に同じ。勸請の始久しうして知るべからずといへり。中古太田道灌

の再興にして、小日向の鎮守なり。祭禮は正、五、九月の十七日なり。當社に元龜の年號あり。庚申待供養の古碑あり。

大日堂 同西の方、大日坂にあり。天台宗にして、覺王山妙足院と號す。相傳ふ、本尊大日如來は、慈覺大師、唐より携へ來る所の靈像なり。往古は叡山の中に安置ありしを、元龜年



大日坂
大日堂

間、織田信長、總門を襲はると頃、堂宇悉く兵火に罹りて灰燼となる。されど此本尊は火焔を遁れ出で、近江國兵主明神の社頭深林の中に移り給ひ、其後夜なく瑞光を放ち給ふ。よつて藤原氏某、感得して其家に移しまるらせ、且暮供養する事怠りなし。然るに此人嗣子なきを憂とし、此尊に祈求して、竟に一女子を設く。長ずるに及んで、紀伊亞相頼宣卿に仕へ奉り、後落飾して法善尼と號す、此尼靈夢を感ずるの後、當寺を闢き、ことに安置し奉りしといへり。

大洗堰 目白の涯下にあり。承應年間、嚴命により、當國多摩郡牟禮邑井頭の池水をして、江戸大城の下に通ぜしむ。其頃此地に堰を築せられ、其上水の餘水を分らるよ。天明六年丙午の洪水に堰崩れたり。ことに於て再び堅固に築せられ、古より壹尺ばかり其高を減ず。故に水嵩む時は、其上を越えて流れ落つる故に、損ずる患なしといへり。

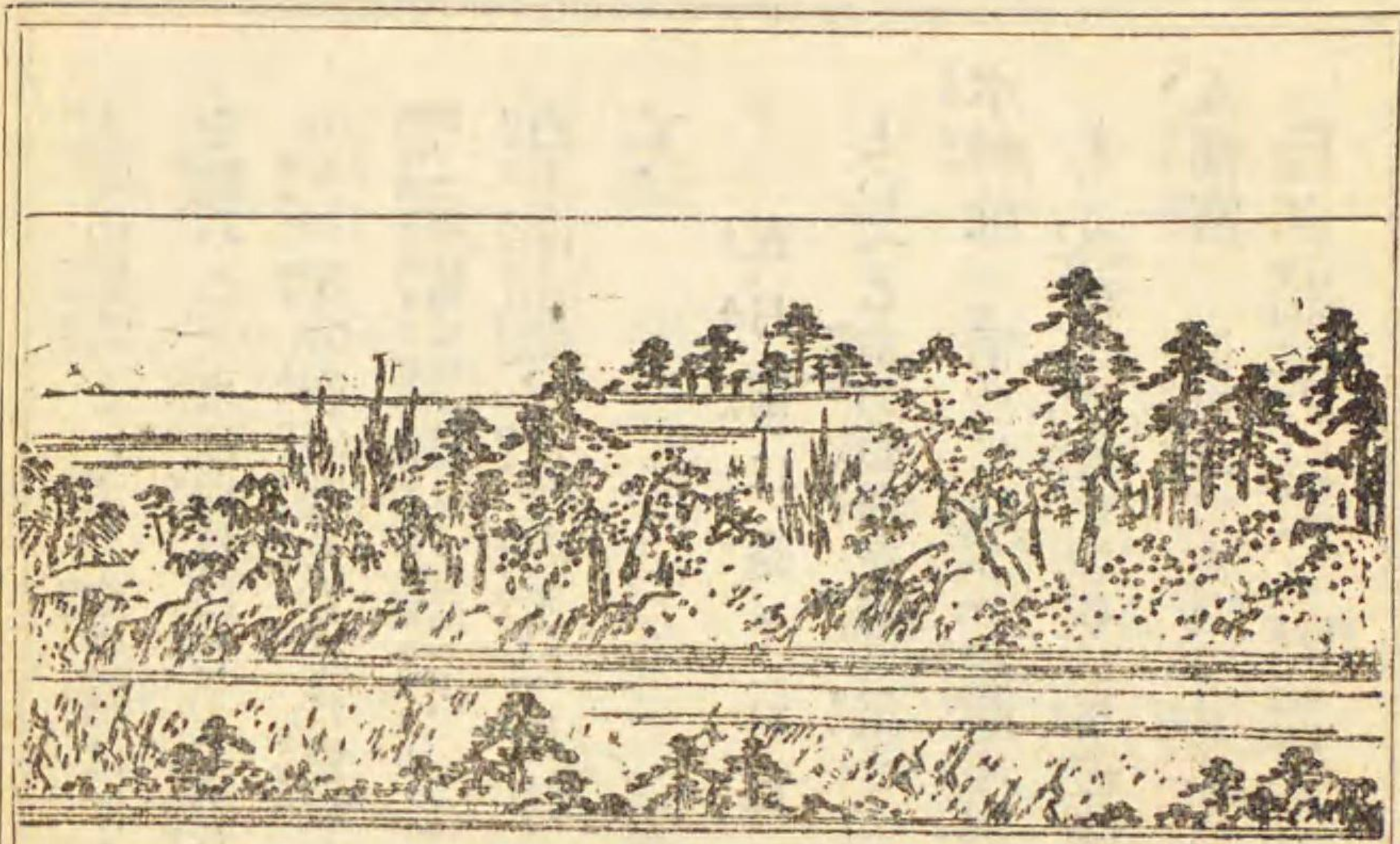
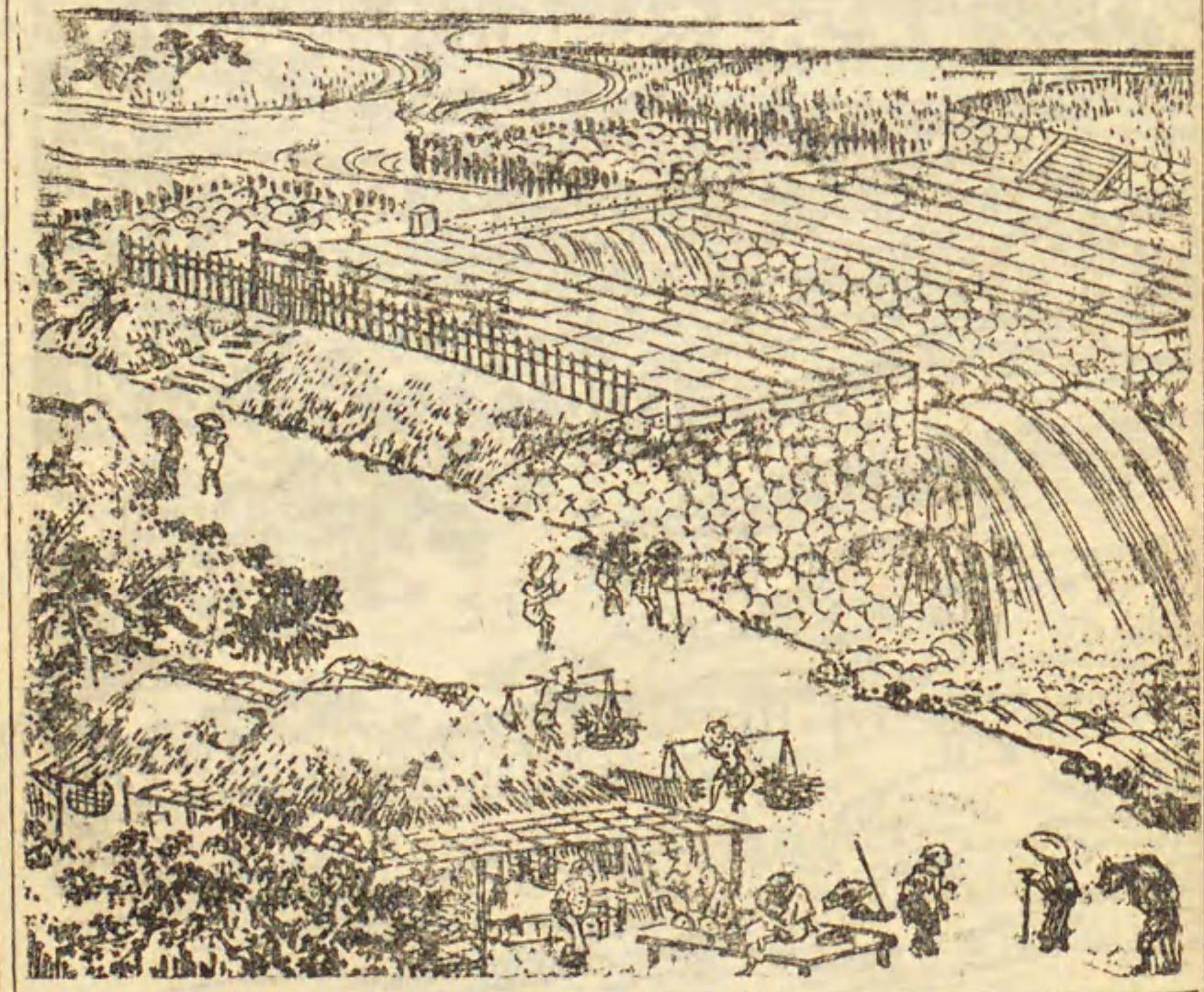
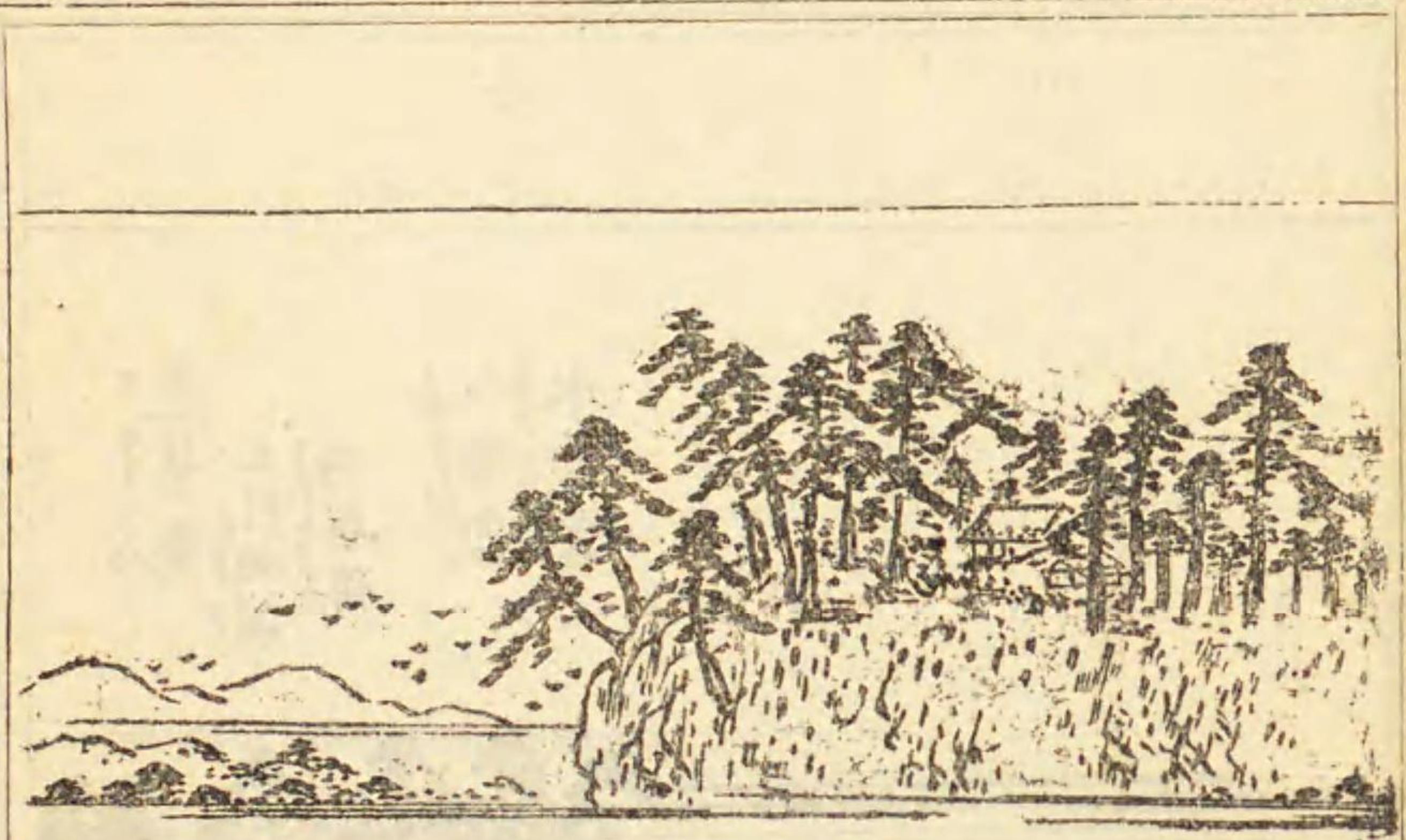
龍隱庵 同所上水堀の端にあり。昔は眞言宗にして、安樂寺と號く。故ありて元祿十年丁丑、黃檗宗に改め、洞雲寺の持となり、洞雲寺は音羽町八丁、平石和尚住持す。本尊は正觀世音、慈覺

大師の彫造といふ。庵の前には上水の流横たはり、南に早稲田の耕田を望み、西に芙蓉の白峯を顧みる。東は堰口にして、水音冷々として禪心を澄しめ、うしろには目白の臺聳えたり。月の夕、雪の朝の風光もまた備れり。昔上水開發の頃、芭蕉翁芭蕉翁、通稱松尾甚七郎といひ、藤堂家の士たり。此上水堀劃の時、藤堂家へ普請の事を命ぜられしに甚七郎此事を司りし故、其頃此地に日々遊ばれしといへり。この地に遊ばれしにより、後世その舊跡を失はんことを歎き、白兔園宗端、及び馬光などいへる俳師、この地の光景江州瀬田の義仲寺に髣髴たるをもて、

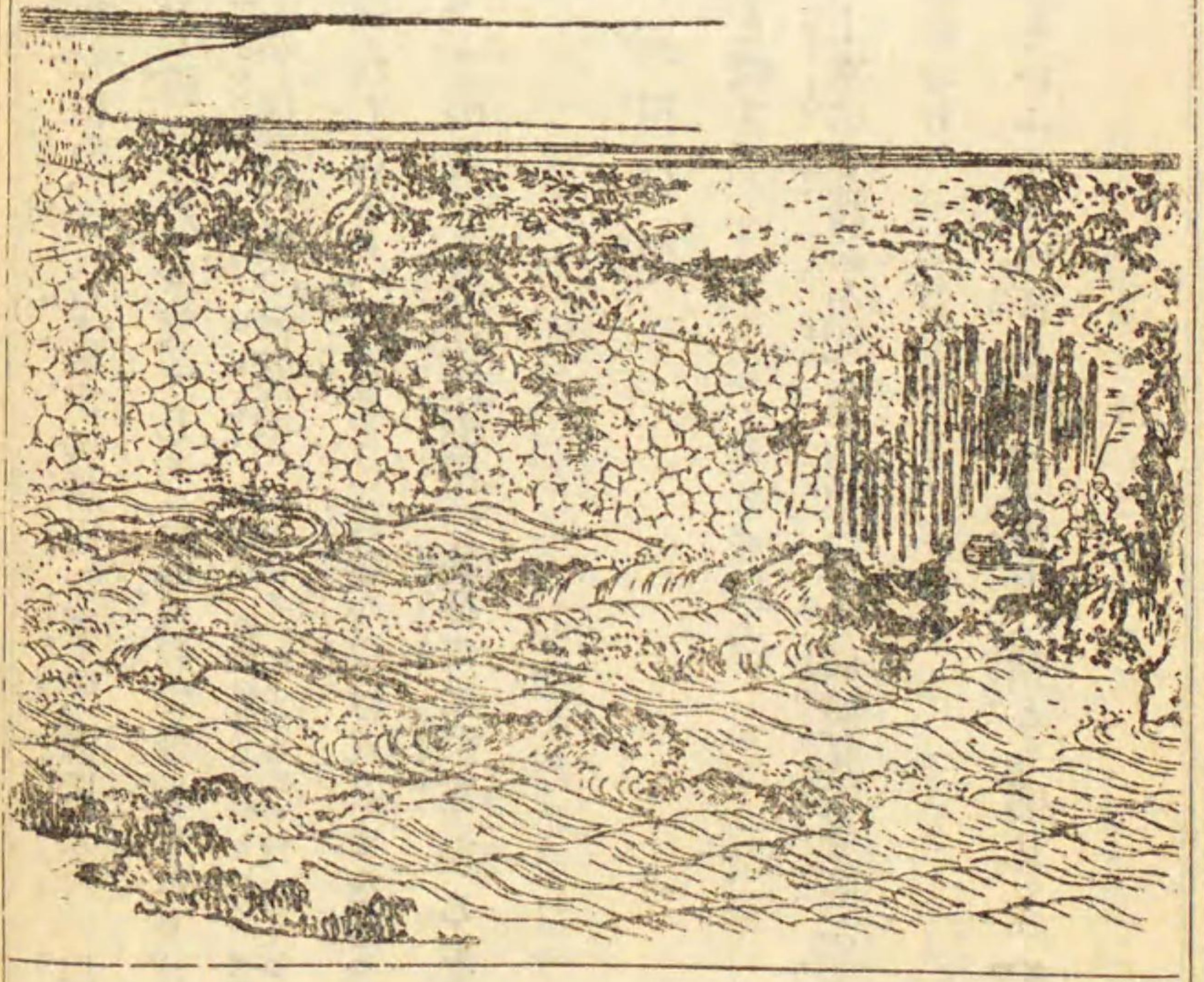
五月雨に隠くれぬものよ瀬田の橋といへる翁の短冊を塚に築き、五月雨塚と號す。

水神社 同所に竝ぶ。龍隱庵別當たり。上水の守護神を祀らん爲に、北辰妙見大菩薩を安置す。祭神は罔象女なり。祭禮は五月十五日なり。

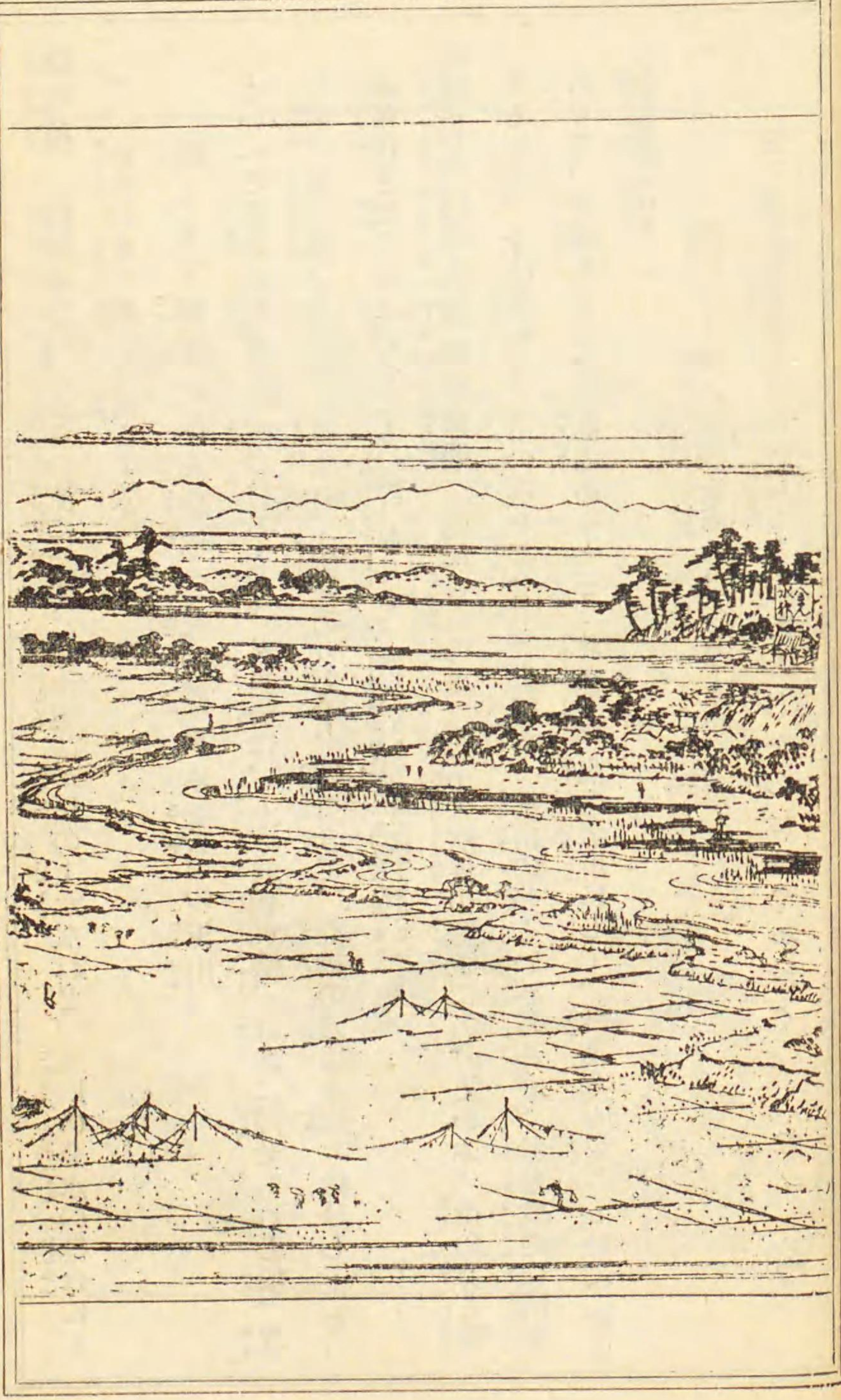
八幡宮 同社地にあり。往古よりの鎮座といふ。下の宮と稱し、椿山八幡とも稱せり。昔は借し故に、椿山と號くと云ふ。祭禮は毎歳八月十五日、上の宮と隔年に執行す。洞雲寺奉祀す。



目白下大洗堰



芭蕉庵
五月雨塚
駒留橋
八幡宮
水神宮



駒留橋 龍隱庵の前、上水の流に架す。此水流は神田の上水なれど、玉川の分水の落合にして、山吹の里に傍ひて流るゝ故に、

駒とめて猶水かはん山吹の花の露そふ井出の玉川

といへる古詠の意をもて號けけるとぞ。又里諺に、右大將頼朝卿、此地に陣せられし頃、雪の朝、此川傳ひを、駒に打乗りて眺望ありしが、興盡きて、此橋の邊より歸り給ひしより、駒留橋と號くるといへども、詳ならず。同所幸神の社記に駒留橋の事あり、此橋

拾穂軒北村季吟翁別莊舊地 同所目白の臺、松平大炊侯の庭中にありといふ。山の井と稱するもの、今は埋れて、名のみを存せり。俳書に、増山の井といへるあり。此翁此地に閑居ありて、著述ありし故に此名ありとぞ。此邊時鳥の名所にして、外よりも早しといへり。按ずるに、別莊の名を疏儂莊といふ。

關口てふ所に別莊を求めはべりて

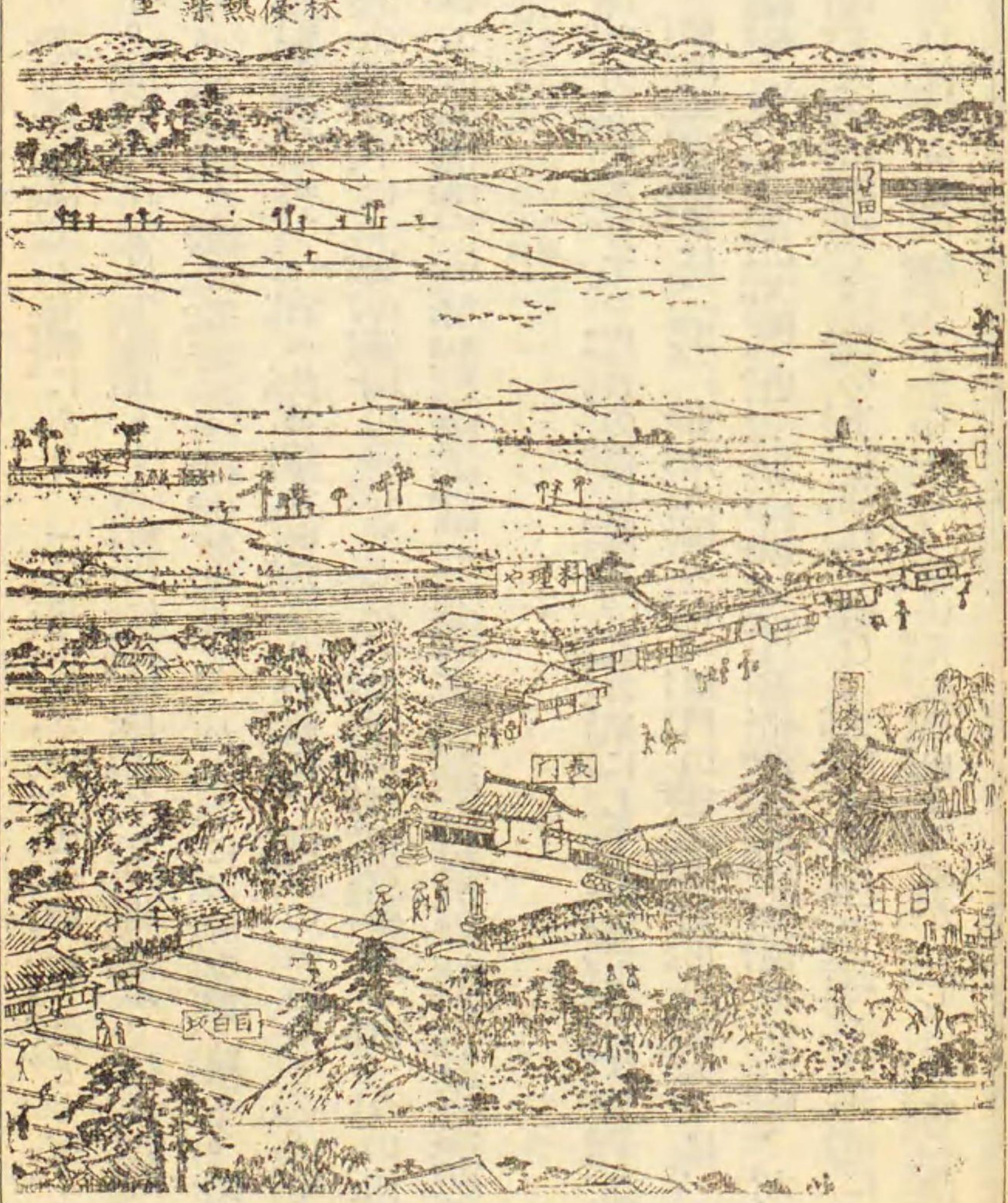
住みつかぬ我宿とはぬ時鳥もとのあるじをしたひてやなく 季 吟



不動堂
境内眺望
勝れり
雪景尤



早秋遊豊山
長谷寺偶然
成詠
偶乘秋景入山林
盡日曾無俗吏侵
巖下清流堪濯熱
况傾河朔酒杯深
春臺



幸神祠 同所東の方、道を隔て右側にあり。一に道山の幸神、或は駒塚社とも號く。祭

神猿田彦大神なり。庚申の日を以て縁日とす。社司は宮城島氏なり。相傳ふ、往昔此所に豪

民あり、今も此邊を長者 金の駒を塚に築籠め、榎樹を栽ゑて、かしこに幸神を勸請す。當社の神

此廟入江なりし頃、其水中より出現ありし故とて、今も猶至射に魘殿の類著きてありと云ふ。古へ此邊鎌倉海道なりし故に、道山の號ありとぞ。中古大

に荒廢して、神木の榎の下に、纒の叢祠のみ存せしを、其頃の神主政泰なる者、今の如く祠

を營み建つるといふ。里謠に云ふ、延寶の頃、金の駒の精あらはれ出でて、此邊の田畑をあらす、里民是をみる事數度なり、追

り。と云ふ。ふ時は山谷に隱る、其名を駒ヶ谷と唱ふ。又橋の上にて其駒の行方を見失ふ故に、其橋を駒留橋といふ

目白不動堂 同所東の方にありて、堰口の涯に臨む。眞言宗にして、東豊山新長谷寺と號す。

長谷小池坊の 本尊不動明王の靈像は、長八 弘法大師の作、總門の額、東豊山の三大字は、南岳

悅山の筆なり。縁起に云く、弘法大師 唐より歸朝の後、羽州湯殿山に參籠ありし時、大日如

來、忽然と不動明王の姿に變現し、瀧の下に現はれ給ひ、大師に告げて云く、此地は諸佛

内證祕密の淨土なれば、有爲の穢火をさらへり、故に凡夫登山する事かたし、今汝に無漏の

上火をあたふべしと宣ひ、持し給ふ所の利劍をもつて、左の御臂を切り給へば、靈火盛に燃

出でて、佛身に充てり。依て大師面前に出現の像二軀を模刻し、一軀は同國荒澤に安置し、

一軀は大師自ら護持なし給ふ。其後野州足利に住せる沙門某、是を感得して奉持せしが、一

年靈感あるを以て、此地の住人松村氏 某にはかり、竟に一字を闕きて、此本尊を移し、安

置なし奉るとなり。往古松村氏靈夢を感じ、本尊不動明王を野州より此地にうつし奉りし頃、沙門某、其途中嵐の爲にうしな

へ此地を乞ひ、石見守その乞に任せて藩邸の地を寄附ありしと云ふ。今この境内是なり、袈裟掛榎と稱するも、則ち此故によりて名とせり。

當寺は、元和四年、和州長谷の小池坊秀算僧正、中興ありし頃、大將軍 公 徳 の嚴命により、

堂塔坊舎御建立あり。また和州長谷寺の本尊と、同木同作の十一面觀世音の像をうつし、新

長谷寺と改む。大將軍 公 大猷 目白の號を賜ひ、元祿の始には、桂昌一位尼公、御歸依淺か

らず。諸堂修理を加へ給ひ、丈餘の地藏尊等を安置なさしめられたり。此地、籠には堰口の

流を帶び、水流淙々として日夜に絶えず。早稻田の村落、高田の森林を望み、風光の地なり。

境内貨食亭多く、何れも涯に臨めり。



関口八幡宮

堰口目白坂の半腹、左側にあり。

神躰は佛工春日の作なりといふ。当社を上

宮と稱す。

下の宮は先に

関口水道町鎮守にして、

祭禮は隔年八月十五日に修行す。

当社も下の

宮に同じく、洞雲寺奉祀たり。

大塚

小石川原町の邊より、護國寺の邊迄の惣名なり。

或人云く、古は大塚の地東西に分つて、甚だ廣莫の地

塚と稱せし

或人云ふ、今の水戸大學侯の藩邸、

古の奥州街道にて、榎木の大樹あるは、其頃の

一里塚にて、則ち大塚と云ふは是なりと。

島侯の東の方、森川氏の構の中に、一堆の塚あるをいふとも、

紫の一本に、塚の上に不動堂

ありとあれば、今の波切不動尊の地、大塚と稱する舊跡にや。

相傳ふ、

太田道灌、相圖の狼

煙を揚ぐる料に築たる塚なり、故に昔は太田塚と唱へけると。

或は又、鎌倉將軍守邦親王、

亂をさけて、

武州比企郡大塚村に逝去す、其廟を王塚と稱す、

こよに大塚と號くるも、此類

ならんといへども、詳ならず。

江戸の内は大塚の

名多し、猶可考。

大法山本傳寺

大塚町横小路にあり。

日蓮宗にして、

駿州蓮永寺に屬す。

昔は禪宗にして、



大塚
本傳寺



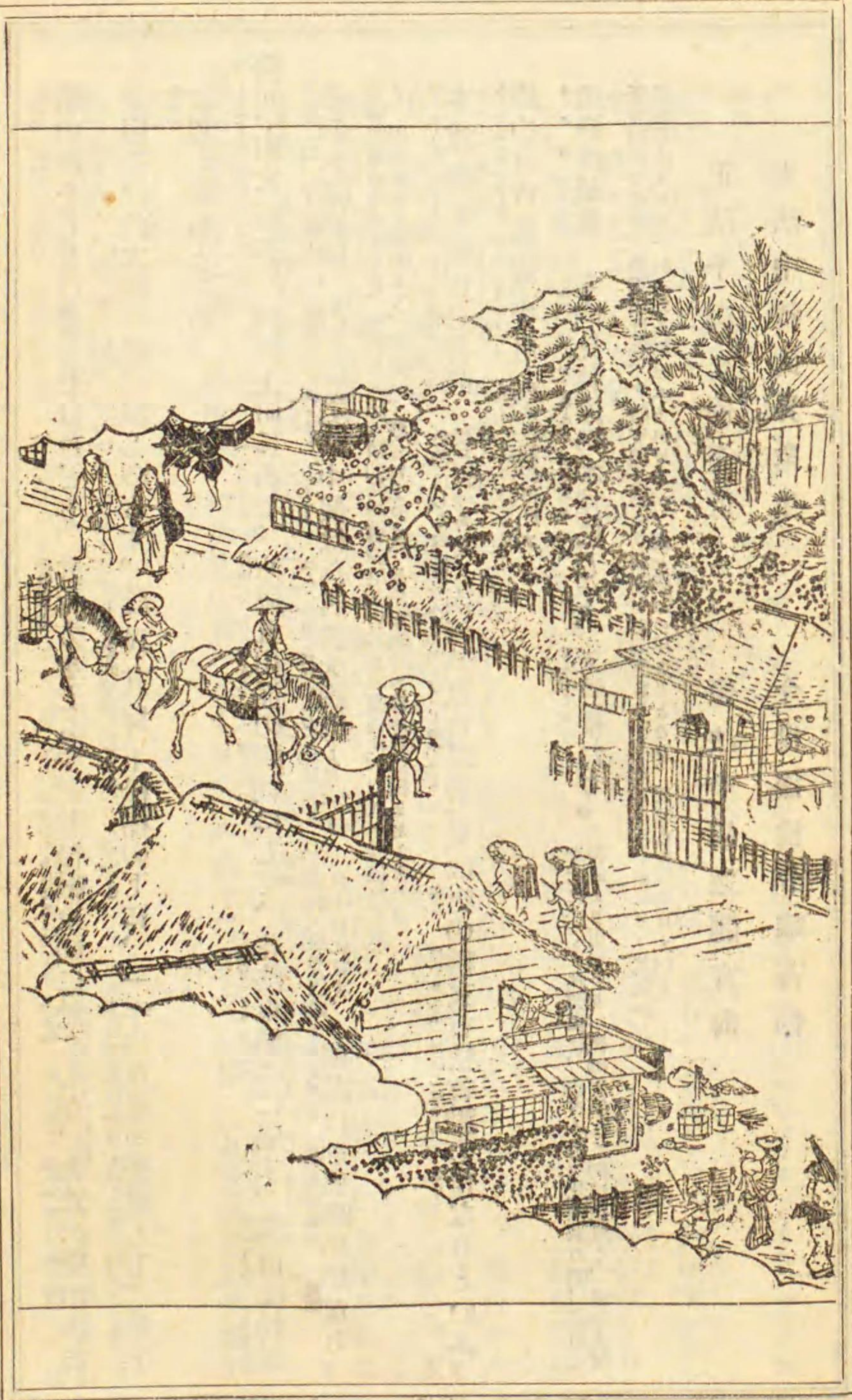
重光山善性寺と號く。元和年間、瑞應禪師、今の宗風に轉じ、自らの名を法仙院日行と改め、寺號をも本傳寺とす。

經讀日蓮大士 緣起に云く、往古當寺中興開山日行上人、始瑞應禪師と稱せし頃、蓮師の宗義を鑑み、覺悟の要路は法華に限る事を發明し、宗風を轉せんとすれども、さすがに心決しがたし。依て元和三年丁巳四月、三七日の間、不動明王の寶前において、法華三昧の行を修しけるに、同二十五日結願の夜の夢に、明王姿を現じ、師に告ていはく、汝前生は法華の行者たりしがとも、臨終の期に至り、唯空永滅の念を起したりし謗執に因て、空無の見到墮つといへども、今宿世の妙種あらはれて、本心に歸れり、速に權宗を捨てよ、實教に入るべし、我も久しく妙法の醍醐味をあまんぜん事を願ひしが、正に今一乘の法蓮を開かんとするの時至れり、社壇の良に當て、基を開くべし、其地必ず妙經讀誦の靈音ありて、不測の像を感得すべしと云々。師終に此靈夢に依て心を決し、同二十八日日遠上人に謁して受戒し、號を日行と改む。日遠上人は、駿州貞公山心性院の寺主なり。又靈示に任せ、同年六月一字を開かんとして、其地をト

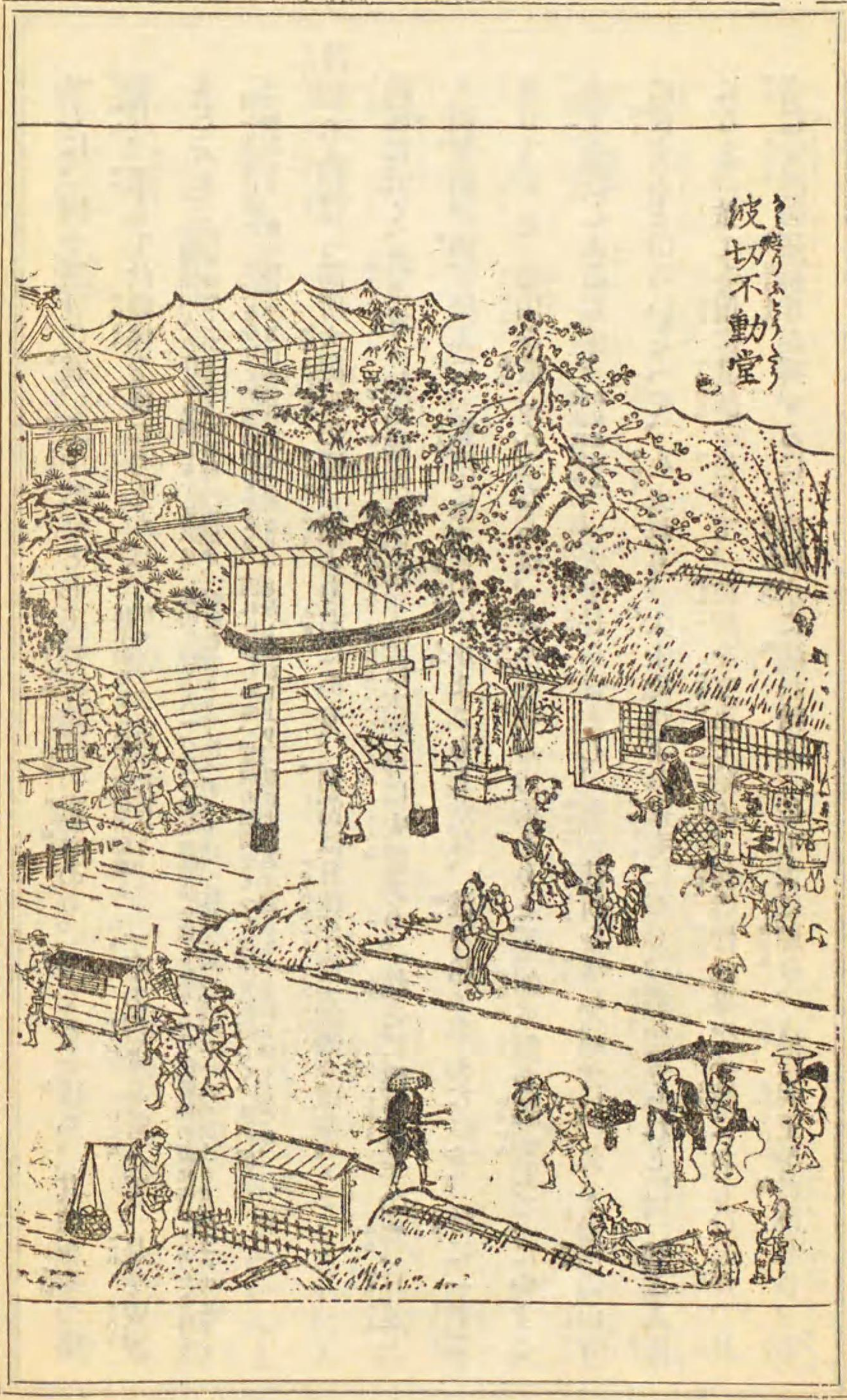
せしに、同十三日の夜、土中忽然として妙經讀誦の靈音あり。翌くるを待ち、其地を穿つ事數尺、果して此靈像を得たりしかば、稱せり。次の條下に出世せり。一字の香堂を營みて、是を安置すと云々。此靈像何人の作なる事しらざる故に、其項日行上人一百日の間法華懺法を修したりしに、靈像師の妻に告げてのたまはく、汝宿緣空しからずして吾像に值遇す、我昔鎌倉より下総へ赴きし頃、此地不動の堂前に一人の信士あり、明王の告ありて我を其菴に請じ、教化を受けて師禮の約をなせり、別れに臨むの時、堂前の松樹をもつて我像を彫造して、彼の信士に授與せり、汝が感得する所の像は則ちこれなり、と示し給ひしより、竟に大士の手刻なる事を知りけりとなん。

波切不動尊 同所大塚町の通、道より右にあり。別當は日蓮宗通玄院と號す。

緣起に云く、此本尊は始め勢州一志郡小幡村大乘寺に安置あり。然るに建長五年の春、日蓮上人伊勢路を過ぎ給ふに、霖雨にて宮川の水まさりしかば、渡り給ふ事あたはず。時に一老翁來りて云く、師川を渡らんとならば、我水を切るの術ありとて、即ち師を誘引して、たやすく水上を渡しまるらす。此故に波切の稱ありといふ。大士是を奇とし、翁の住所を尋ね給ふに、たゞ小幡の山寺に住するとのみいらへて、失去れり。大士それより彼寺に至り、翁を尋られしに、知る人更になし。依て寺僧に其故を告げて、彼所を立出で給ふ。後寺僧此事を不審におもひしが、其寺に安置の不動尊を拜するに、佛鉢水に濡れ給ふ。依て大に驚き、直に明王を負ひ奉り、宗



波切不動堂



祖の跡をしたひ参らせけれども、其行方をしらす。其後猶東國に赴きしが、本尊の靈示あるを以て、此大塚の邊に移し参らす。農民其塚上松樹の下に、一字の草堂を營建して、是を安置し奉るとなり。

普門山大慈寺 同所上町にあり。京師五山派の禪刹にして、花洛東福寺に屬す。開山は勅諭

佛知大通國師、觀應二年辛卯五月廿五日寂す。中興は萬古昔大禪師と號す。承應二年癸巳四月十日化寂す。開基は刑部卿の局なり。

天壽院殿の侍女にして、法號を大慈寺殿仙林榮壽禪尼といへり。慶長四年、八十餘歳にて逝す。則ち當寺に墓あり。碑銘は、嚴命によりて、品川東海寺の澤庵和尚撰まるとなり。

本尊葵正觀世音菩薩 坐像にして御長三寸あり。南天竺毘首謁磨、又は唐の稽文會稽首勳の作なりといふ。

鎮守日吉豐國兩社 江戸一社の神なり。社人内藤氏奉祀す。

造酒地藏尊 寺境見耕庵の本尊にして、天竺佛たり。寺記に云く、此像は、往古小田原北條家の頃、品川の海底より出現あり。後御當家にて御信敬厚く、當寺大清

哲禪師任寺の頃、葵正觀世音、火防守護の爲め見耕庵を御建立ありて、こゝに移し給へり。其先小笠原意太夫の家へ此本尊を賜はせられけるが、種々威靈の事ありとなり。其頃或夜佛告げて曰く、

正法千歳在佛在世 像法千歳遊龍宮海

末法中救此界衆生 今世後世令離苦惱

いかなる故にや、此本尊酒を好み給ふ故に、造酒の二字も、嚴命によりて稱せしめ給ひ、又造酒の二字を御額になきしめられ、當寺に御奉納ありしとなり。今も祈願あるものは、必ず酒(ミヤ)を捧げ奉る。

縁起に云く、葵正觀世音菩薩は昔時行教律師、天竺より携へ來りし靈像なり。欽明天皇已

來、轉々して、右大將賴朝卿、及び足利家に傳はり、夫より後代々の將軍家、崇信厚かり

しとなり。中古日向國志布施の龍興山大慈寺にあり。其後又花洛東福寺の支院、三好山長慶

寺の本尊たりしを、東照大神君御崇敬ましく、竟に江戸の大城へ遷座なし給ひ、毎月十八

日、天下泰平の御祈禱として、觀音懺法等を修せしめられ、殊更葵の一字をも附し給ひ、天

壽院殿も御信心淺からざりしにより、慶安二年、當寺を創し給ひ、刑部卿の局を開基とな

され、此本尊を當寺に移し給ふとなり。當寺日向國志布施の龍興山大慈寺を引きて創基なし給ふ所なり。山號

鳩巢室先生之墓 同所坂下町の北の裏、少し斗の岡の上にあり。傍に息男忠三郎洪謨の

墓もあり。

先生姓は室(ムロ)氏、諱は直清、字は師禪、鳩巢と號す。通稱は新助、齋を命じて靜儉といふ。其先熊谷直實の裔にして、備中國英賀(アカ)郡に出生。考諱は玄撰、草庵と號す。妣は平野氏、萬治元年戊戌江戸谷中邑に産す。異質あり、睿敏人に絶す。加藩に入て官し、業を木下順庵先生の門に受け、京師に客たり。討論の暇、大學新疏を著し、以て章句の藪を發す。正徳元年、東臺の徴に應じ、來つて江府に就いて、往

復贈答の什、積つて巻装を成す。應對流るゝが如し。大東振古いまだあらざる所、以て大東文明の美を耀し、邦國治平の盛なるを聲して、に風海表に播し、是を無窮に宣るに足れり。
有徳公統を繼ぎて後、特に先生を選んで管中侍講を授く。此職の設、蓋この先生に始る。嘗て鈞旨を奉じ、五倫五常の名義を疏記するに國字を以し、書成つて是を獻す。又六諭衍義大意を述べ、官命じて是を録め天下に布す。是より先、論孟中庸及び易經廣義を著す。考訂其及ばざる先、災に罹りて亡ぶ。先生偶未疾を感じて、重ねて稿を屬する事あたはず。侵淫日に甚しく、終に以て愈えず、疾を陳じて老を乞ふ者再三、優命す、猶職名を帯びて家居し、頤養を以て事とせり。病間談臺雜話を著す、旨あり是を徵す。因て以て獻す。又大極圖述を著し、編を成す。瀧岡千載の祕を弘闡し、後學を來世に俟つ。これ乃ち先生の絶筆なり。享保十九年甲寅八月十二日、駿臺の賜第に卒す、年七十八。州の豊島郡大塚里に葬る。
以上福葉文集前編伊東貞齋休の叙に出たり。其要を摘みて記す。

筑波山護持院

音羽町の北にあり。

眞言宗にして、

和州長谷の一派なり。

寺領千有五百石を

附せらる。

本堂本尊不動明王

作不詳。往古は本尊に釋迦佛を安置せしと云ふ。

歡喜天

同右に

蟹ヶ池

庭前の池をいへり。當寺建立なきまへは、此地の名を、せりくとも、昔此所より、藥師如來の像出現ありしと云ふ。又

權現山

後園小高き岳を云ふ。

東照大神御正眞の御寫像を安置し奉る。自から御影を植ゑさせ給ふといふ。

當寺開祖權僧正光譽は、

和州初瀬寺の西藏院に住職ありしに、

御歸依淺からず、

江府に召れ、

常州筑波山の宿寺を下し給ふ。

則ち知足院と號す。其始め、知足院宥俊は、下野國筑波山中善寺を兼帶

し、眞言新義四箇寺の支配たり。慶長の始め、大神君の嚴命を蒙り、江城の護持所と定めさせ

られ、同庚戌の年江戸銀町に寺院を賜ふ。其地未考、九軒町の事歟。依て光譽知足院を遷し營建す。同癸

亥年、大坂御陣の頃も、光譽命を受けて、御陣中に於て祈禱す。其後寛永三年丙寅、大猷公、

諸伽藍御建立あり。延寶二甲寅年、有廟御再修ありしが、天和五年壬戌十二月、火災に罹る。

よつて貞享元年甲子、湯島切通に移し賜ふ。今の根生院の地なり。憲廟御歸依淺からず、元祿任元の年、

神田橋の外、武士屋敷の地に移され、松平若狹守、仙石越前守に命ぜられ、護摩堂、祖師堂、

觀音堂、經堂、灌頂堂、鐘樓堂、二天門、坊舎に至る迄、金銀をちりばめ給ひ、隆光を開

山とし、權僧正に任せらる。又護持堂御建立あつて、釋迦佛を安置せらる。同四年八月、寺

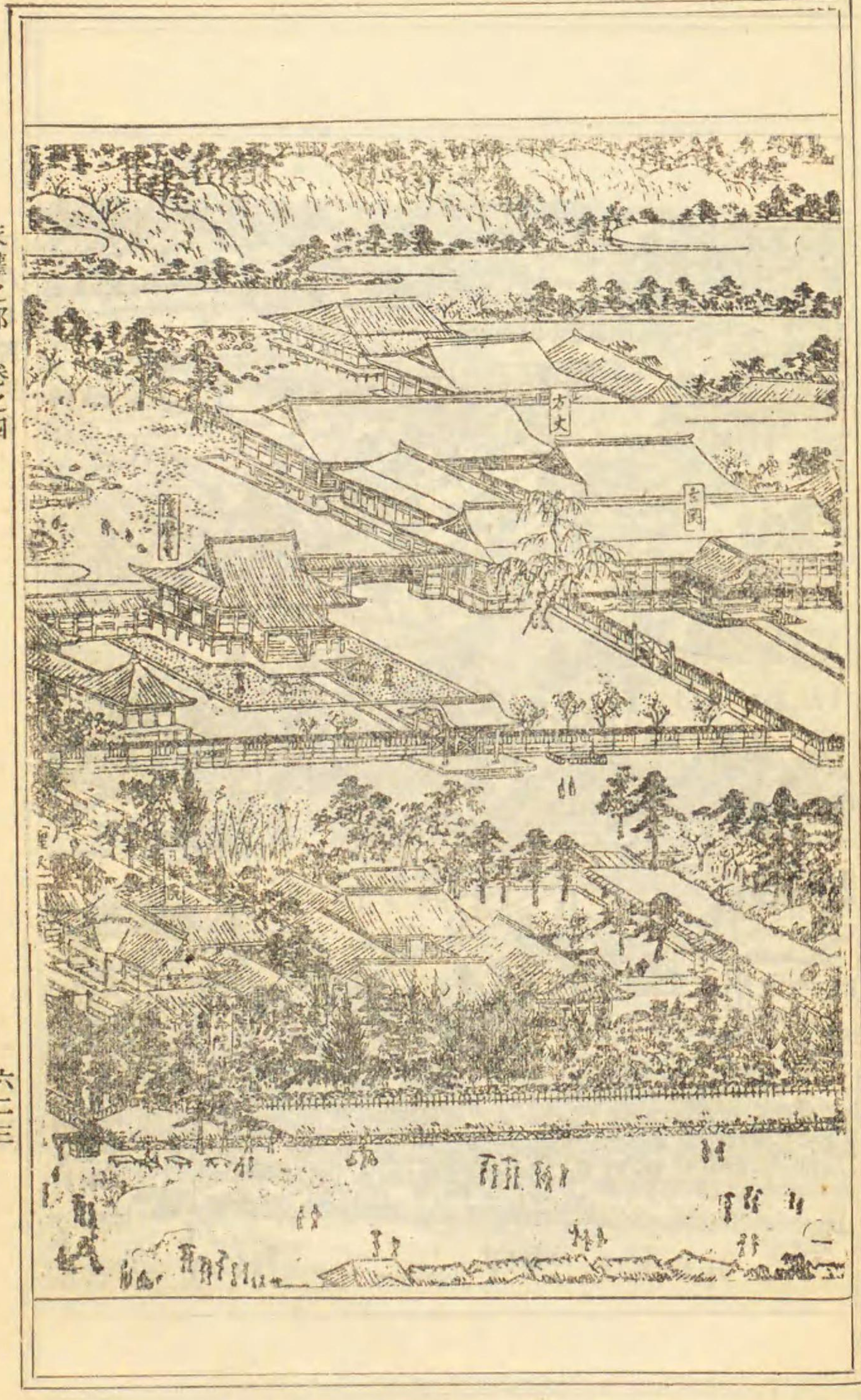
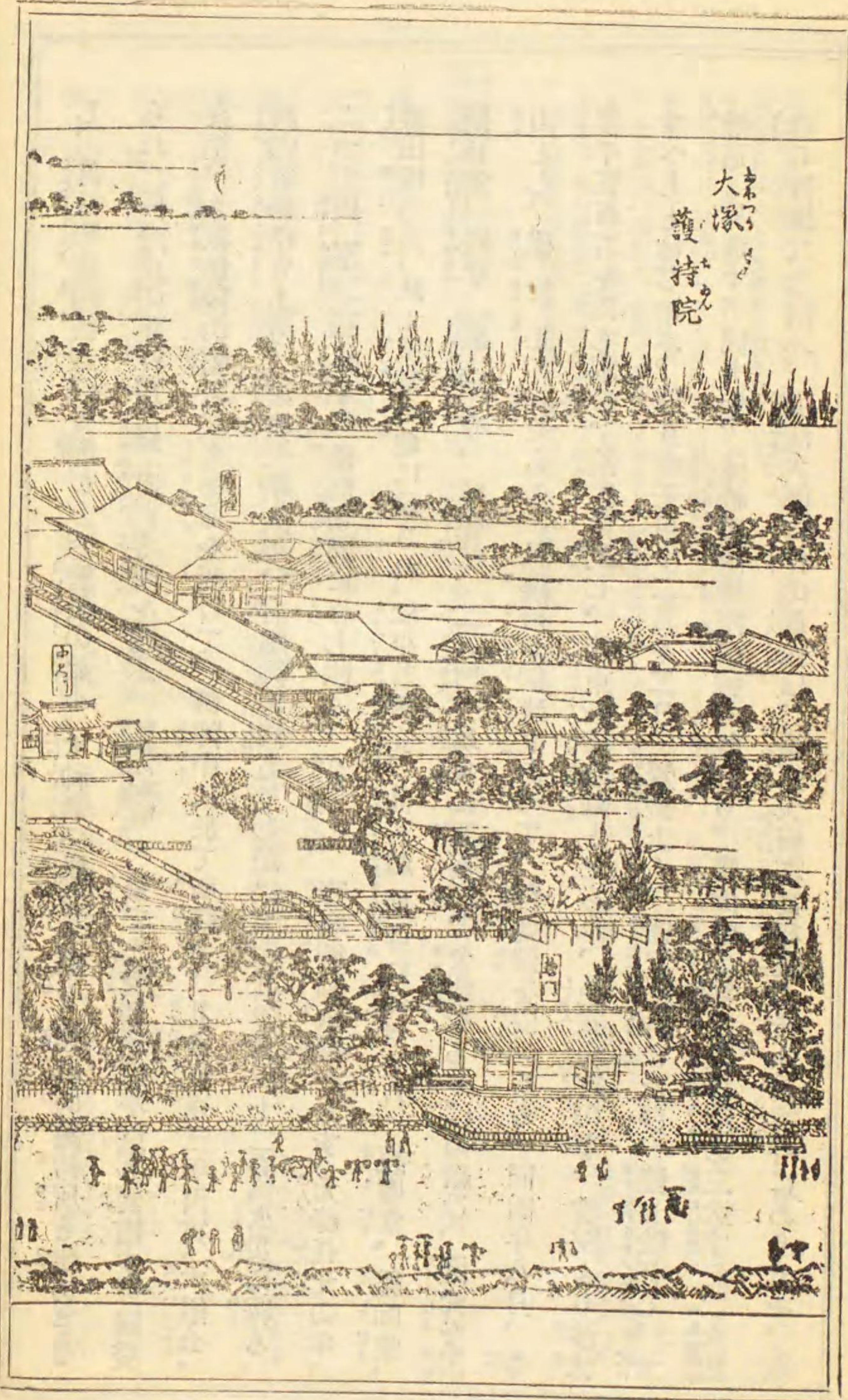
領千五百石を附し賜ひ、院家に列し、關東新義惣録とせられ、色衣免許の事、當院より沙汰

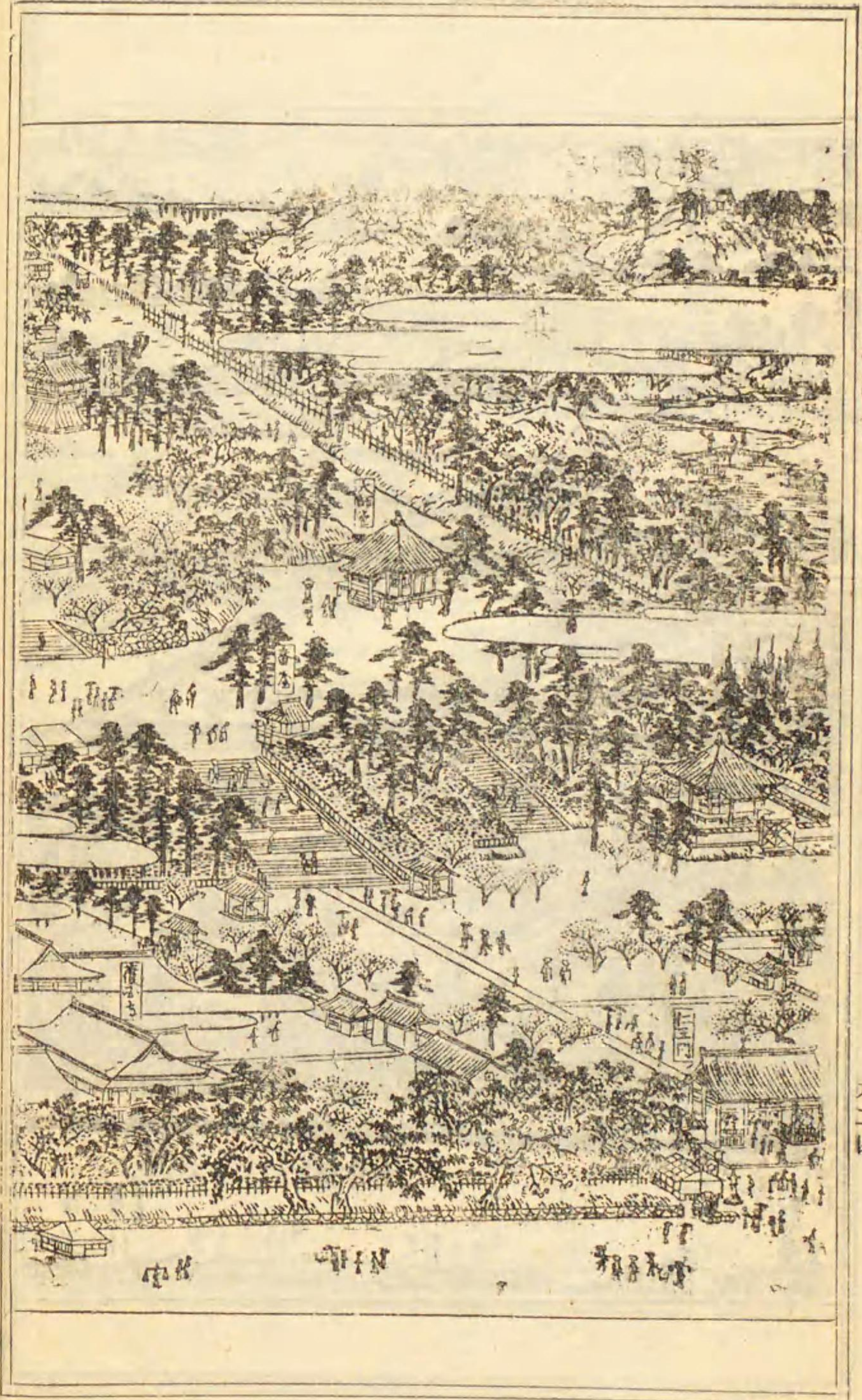
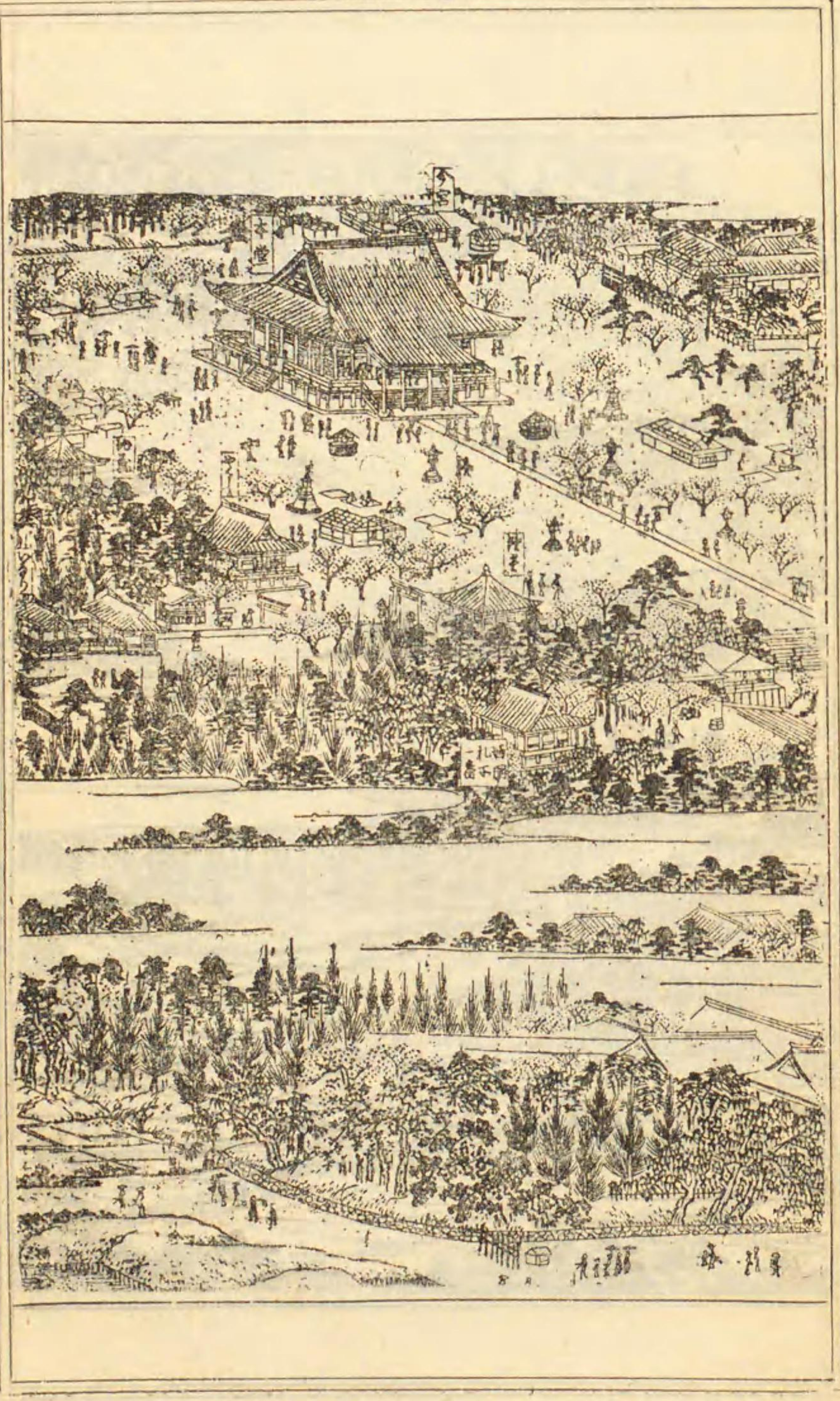
すべしと命じ給ふ。同五年壬申十二月十二日、覺錢上人、贈官の時に及び、隆光改任し、大

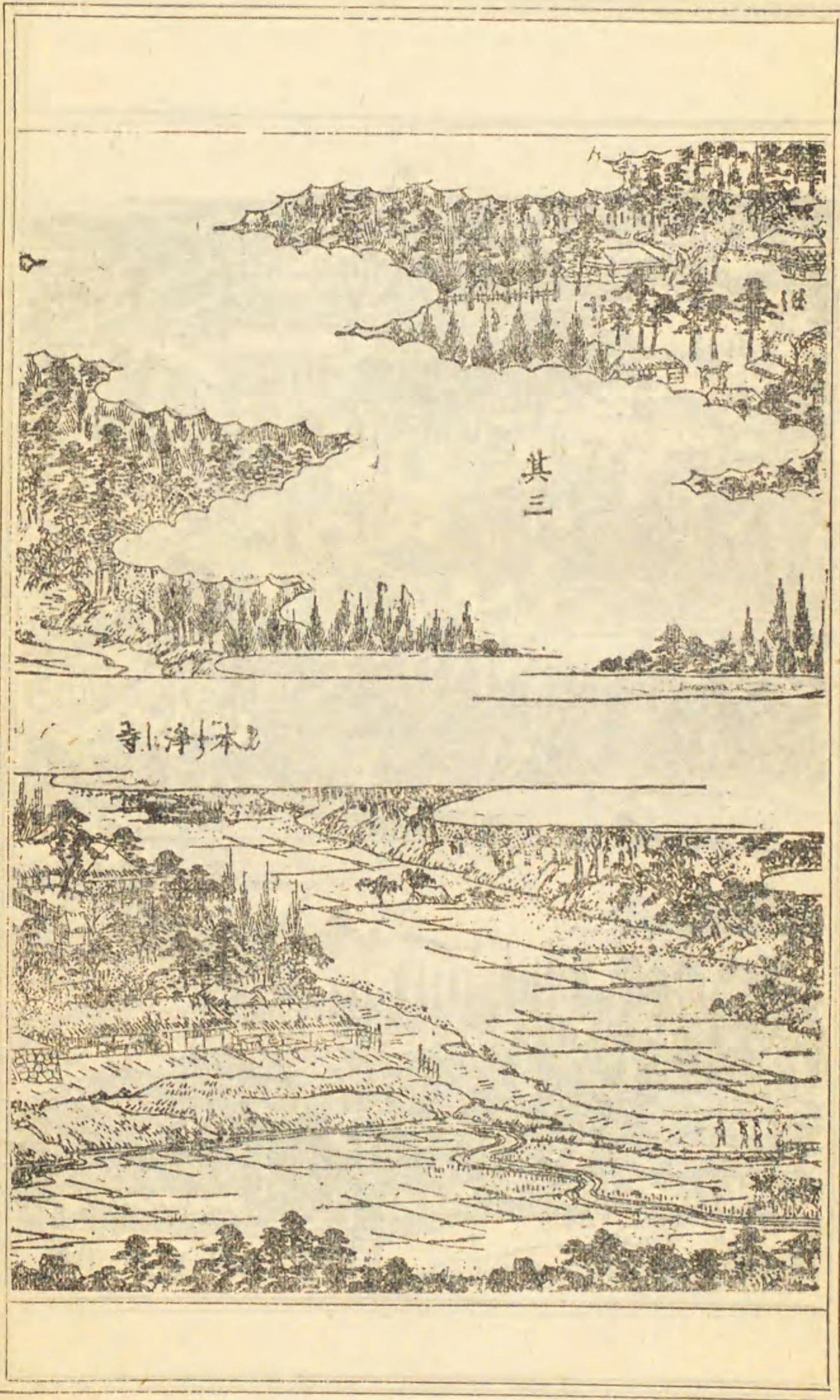
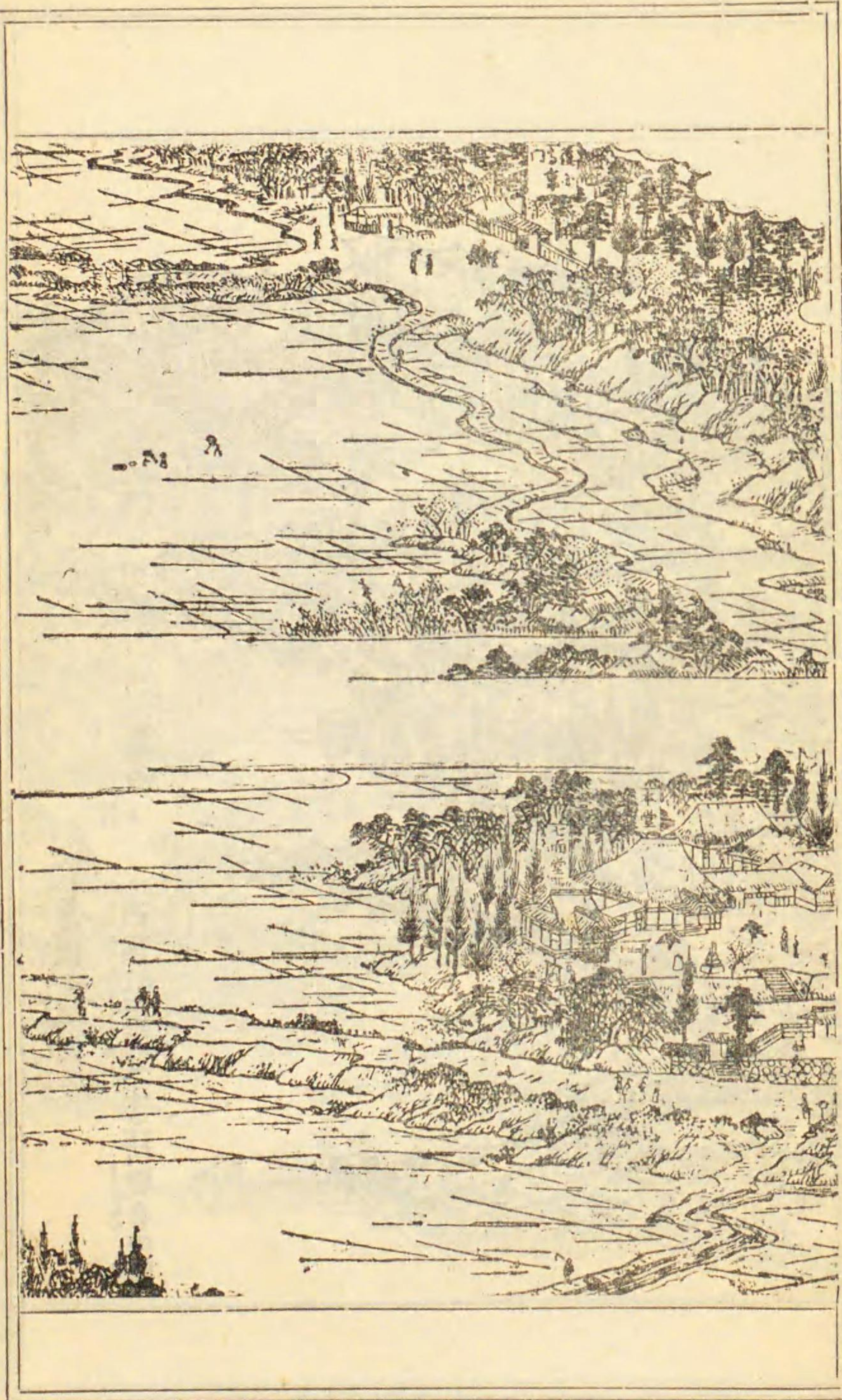
僧正に昇進す。同九年、元祿山護持院の號を賜はり。護摩堂の額、護持院の三大字を、大樹

自ら灑筆なし給ふ。弘法大師自作の眞像は、濃州大野郡實相院と云ふ眞言寺にありしを、取

大塚
護持院





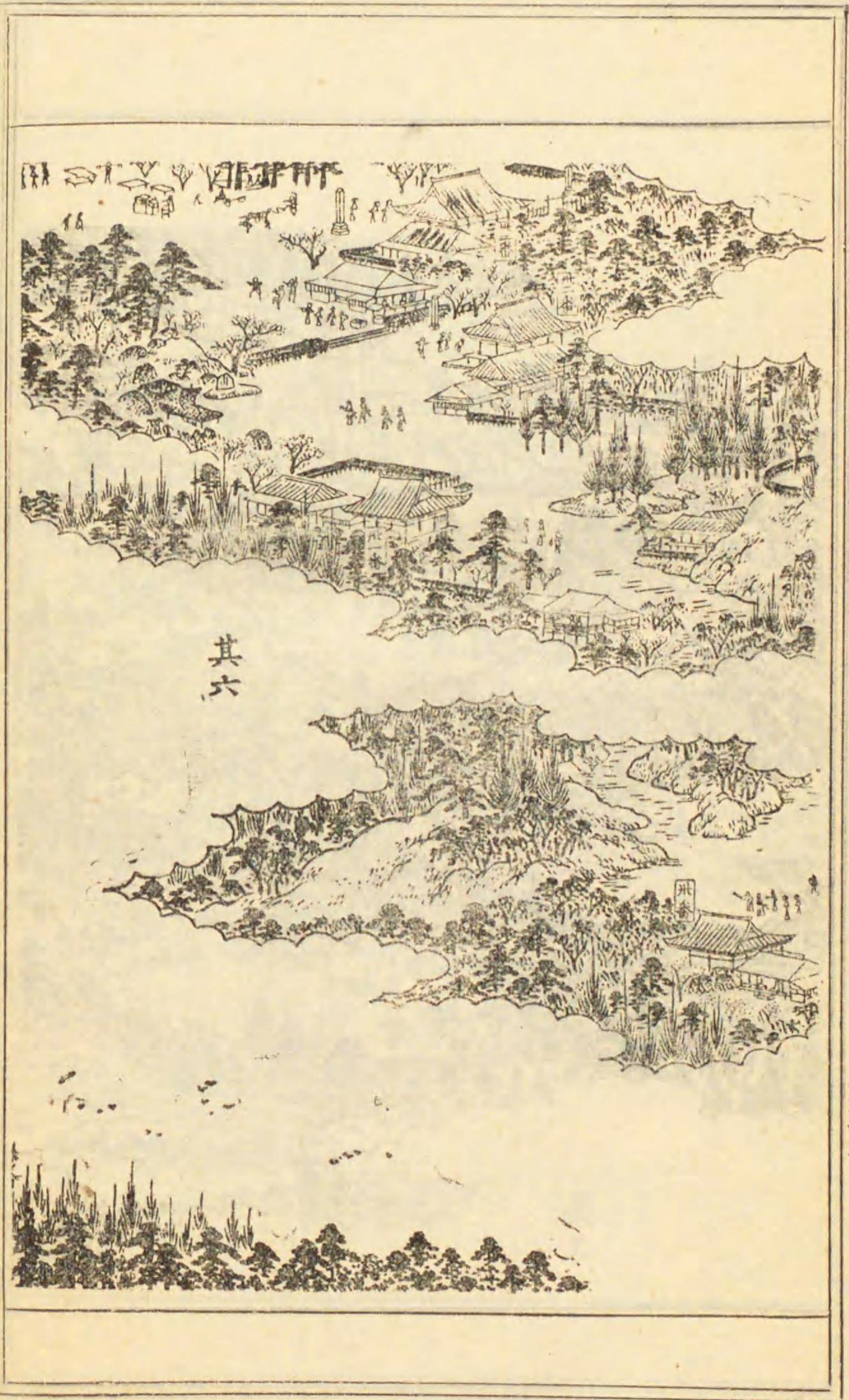




其四

護國寺境内
西園礼所寫三十三所觀音の圖





寄せられ、祖師堂に安置せしむ。観音堂の本尊は、有廟御信敬の御守護佛なり。大僧正隆光の願により、寶永四年丁亥二月廿五日、退隠して駿河臺に遷り、成滿院と號す。依て護國寺住持快意僧正を後住とし、御成ありて、繁昌先の如し。寶永六年己丑八月六日、隆光願により、大和國に至る。故に成滿院の跡快意に賜ふ。仍て爰に隱居す。後住は知積院小池房、住職たるべき命ありて入院す。然るに享保二年丁酉正月廿二日、火災ありて、堂塔一字も不殘焼失しければ、その頃住持退隱の願により、夫より後寺號及び食祿とも護國寺に賜ひ、大塚護國寺の内に遷し、江城護持の御祈願所となさしめられ、筑波山兼帶す。坊舎日輪院月輪院と云ふあり。

山開 毎年三月廿一日、弘法大師の御影供修行あり。此日諸人に庭中の材景を見する

神齡山護國寺 悉地院と號す。音羽町の北にあり。新義の眞言宗にして、和州長谷小池坊に屬す。開山を亮賢僧正と號す。公より寺領千二百石を附せられ、盛大の地なり。古應子(ツカ)寺領三百石、大猷公守御本尊瑤瑤不觀音像開基とあり

本堂本尊如意輪觀世音瑤瑤石にして、天然のものなり。元祿半ばの頃、前川三左衛門入道壽といへる人、異邦に渡り、持故あつて桂昌一位尼公崇敬し給ひし由、事跡合考に見えたり。本堂の柱を猿柱と云ひて、木理猿の面に等し。

藥師堂本堂左にあり。本尊藥師佛は、昔當寺草創の時、此地蟹ヶ池より出現ありし靈像なりといへり。今の本尊藥師佛の胎中に收む。左右に十二神將の像を置き、

西國三十三番順禮札所寫本堂より西の方の山間にあり。天明年間、深林を伐り開き、各其地勢に因て像を換す。四時草木の花絶えずして、諸人の眼をよるこぼしむ。

歡喜天境内壽命院に安ず。桂昌一位尼公尊信の本尊なりとぞ。永代不退轉に、天下安全の浴油の法を修せしめられ、寺産を賜ふ。

仁王門仁王の裏に置く所の廣目增長の二天の像は、古への火災に残りしといふ。今宮五社當所鎮守と云ふ、天照大神宮、八幡大神、春日大明神、今宮大明神、三部大權現、五社を祭る。音羽町、青柳町、櫻木町等の鎮守なりと云ふ。

涅槃像大幅當寺寶物とす。狩野安信の筆なり。足代(アンロ)をくみ、てしやちを掛け引き上げて、軸本まで開かれずといふ。

當寺は延寶九年二月七日、上野國八幡別當大聖護國寺の住持法印亮賢に、高田御藥園の地を賜ひて寺とす。依て大聖護國寺と號す。亮賢、初め御在胎の時より、御祈禱を奉りし故なり。

天和元年に、憲廟將軍の宣下蒙り給ひて、同年五月廿八日、都下新建の大聖護國寺を仁和寺

に録して院家とす。依て寺領三百石を附し給ふ。貞享二年十二月廿八日に、大聖護國寺住

持法印賢廣黃衣を許さる。其後元祿年中、桂昌院殿一位尼公の御志願によつて、御藥園の地

を轉じ、其頃御建立ありし江戸密乘最大の梵宇にして、結構備れり。春時は櫻花爛漫として、

頗る地勢洛の御室に髣髴たり。武江神寺錄に、元祿十丁丑、相馬重正少將に命ぜられ、再び修造なし給ふとあり。此地元

當寺は京の清水寺を模さるる故に、前の町を音羽となづけ、又音柳町、櫻木町などなづけられ、又音羽町九丁

當寺に桂昌一位尼公御遺物を收めらる。今猶傳へて、開帳の頃、諸人に拜せしむ。金銀をち

りばめ、其結構言葉にのべ盡しがたし。

星谷の井舊地護國寺の西の谷にあり。其地を星谷と號す。往古此地に星祭を修する行者ありて、本淨寺の裏に塚のごときものありて、星産と號け、其傍に一ツの井ありしとぞ。此

井旱魃にも水絶えず涌出せしが、其後埋れて、今わづかに其跡を存す。符水、藥水に求むる

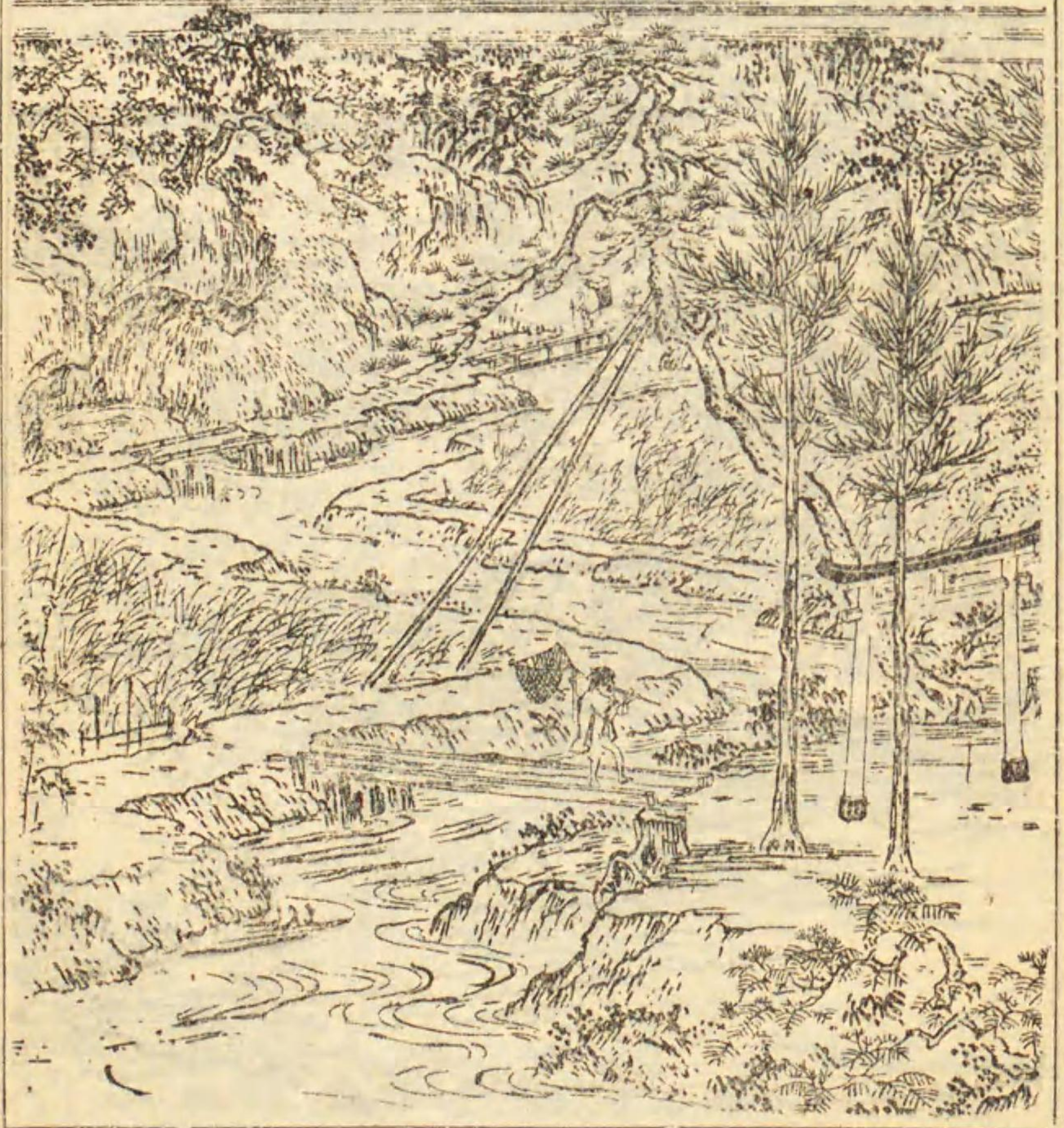
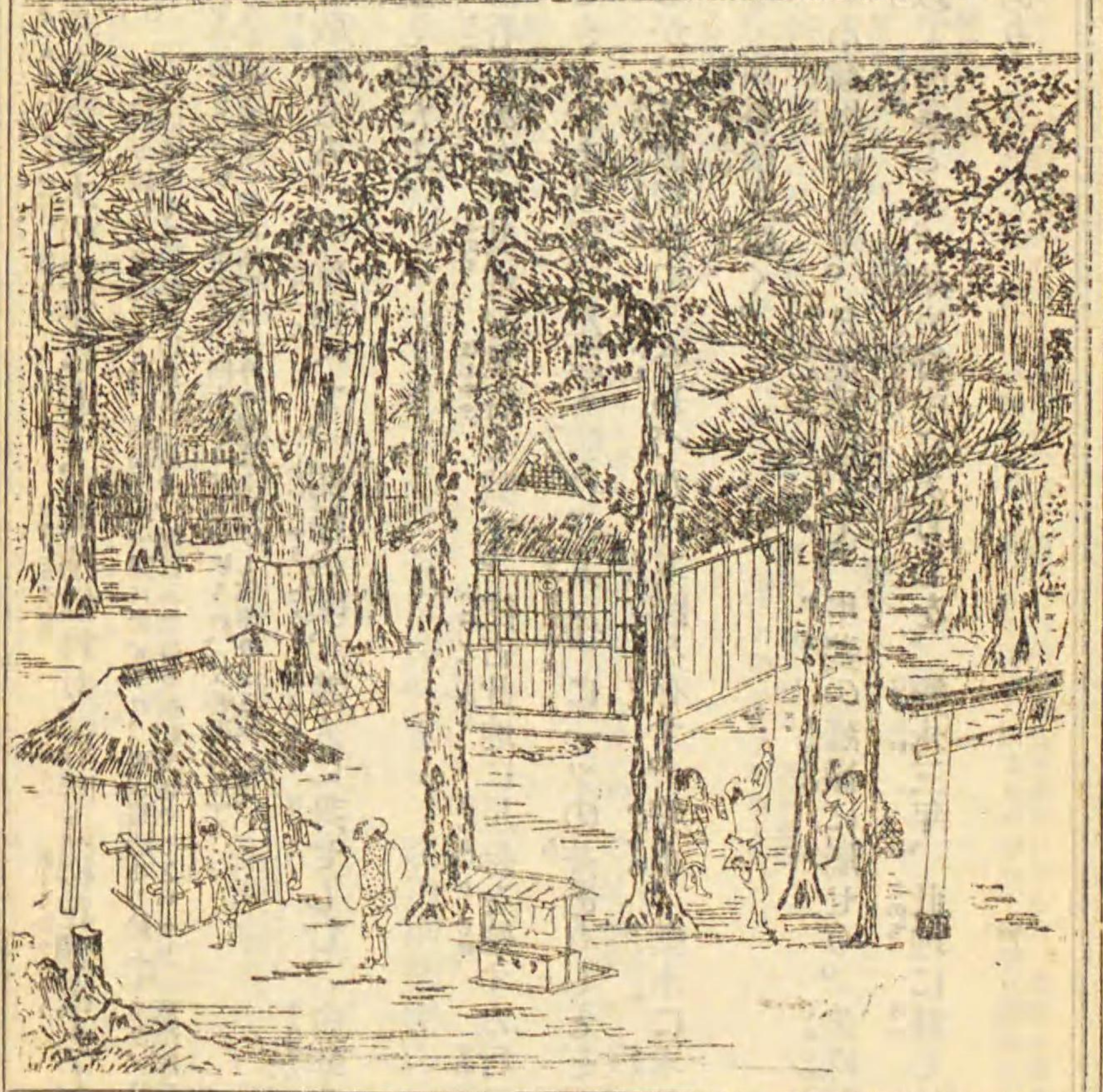
人多し。此下流にかゝる橋を、星谷橋と號く。

大野山本淨寺護國寺の西、小篠坂にあり。日蓮宗にして、甲斐の延嶺に屬せり。眞珠院日

要上人日要上人は身延山願を以て開基とす。始め谷中にありしを、寶永三年、此地に移しける

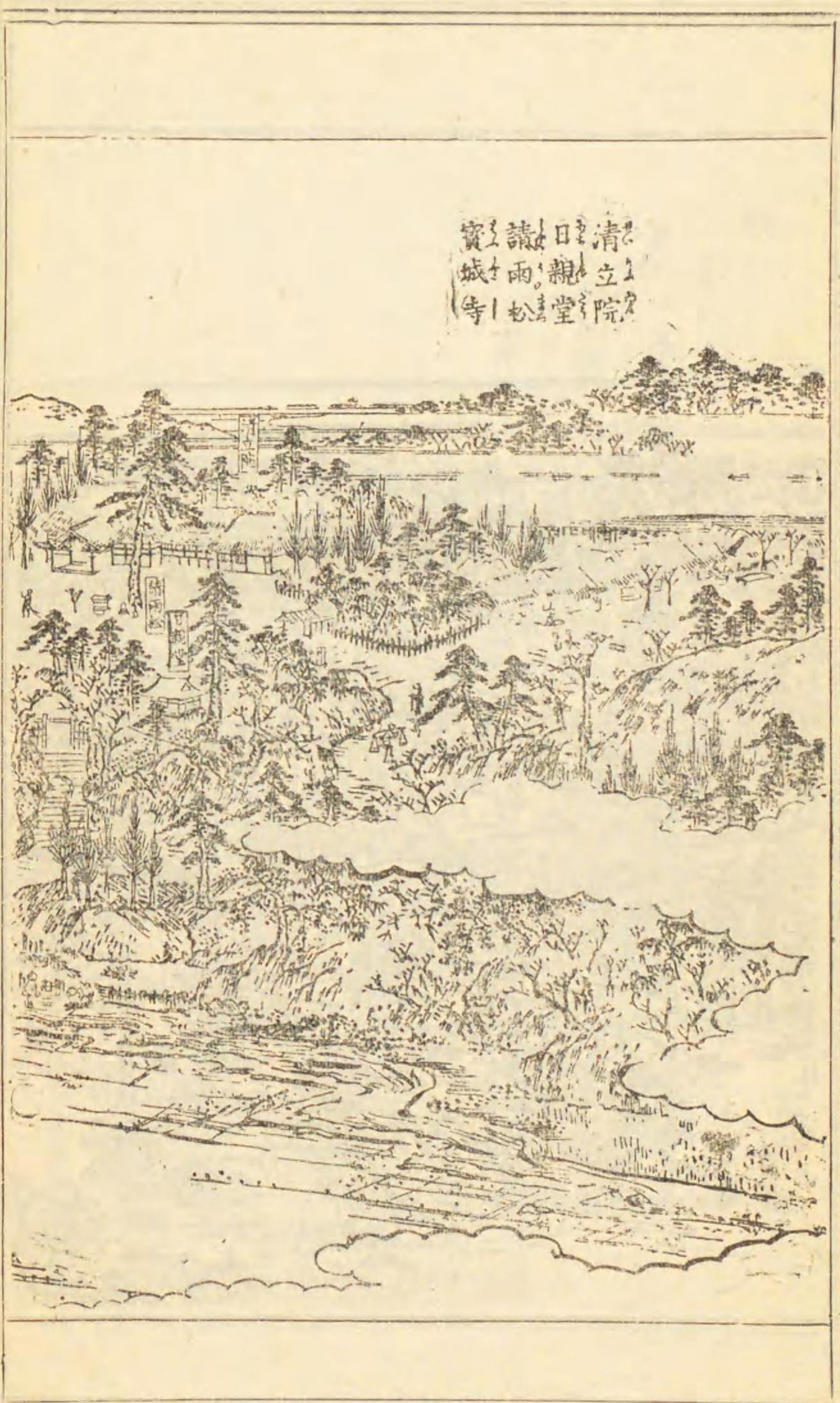
とぞ。當寺に宗祖上人の像あり。

清土の清水
雖も谷鬼子母津
の出現ありて
さう七軒と云
ふ一軒ありと
おつはるれり





清立院
日親堂
讀雨松
寶城寺



七面大明神 神祇を身延難形の尊像といふ。往古本山貫首日悦上人、紫衣勅許の事につき、當寺檀那大野氏、藤江何某、副功少、九月十八日祭祀にて、前後より參詣あり。

大黒天

日蓮上人安房の清澄(キヨスミ)にいましめ頃、虚空藏の尊前に智慧を祈り、讀經數日に及び、青葉香を焚きて奉り、其灰を集めて、弘安三年に大黒天の像を造らるゝと云なり。則ち背面に其事を記す。日蓮上人の眞筆なりとあり。

此經尊日蓮日讀以青龍煉之五百滅後流布是生印

此靈像を日親上人感得ありて、證書を添へらる。後橋井氏某、當寺に收め參らすといふ。是生とは、日蓮大士清澄寺の道善を師とし、落飾染衣の後、道善命ずる所の名なり。

御嶽山清立院

護國寺の裏門より、雜司ヶ谷鬼子母神へ行く道の右側、小坂に傍ひてあり

雜司ヶ谷本龍寺の持とす。

常唱堂に安ずる所の宗祖上人の靈像は、日法上人

の眞作なりといふ。相傳ふ、正嘉年間、關東疫疾流行しける頃、行脚の沙門、此草堂に投宿

の間、此地の人の病患を救ひ、又別に臨むの時、此靈像を止め置きたりといへり。

此靈像感得ありて、釋人大に信敬せり。此樹下に存する所の石像は、日意師の肖像なり。

雜司ヶ谷鬼子母神出現所 本淨寺より南にあり。此地を清土といふ。蒼林の中に小社あり、

則ち雜司ヶ谷鬼子母神出現の地にして、同じ神を鎮れり。社前にある所の井泉を、星の清水

と號く。往古鬼子母神出現の頃、此井に星の影を顯現せし事ありし故に名づくるといへり。

其井桁の形三稜なる故に、土俗三角井ともあだなせり。

不動山寶生寺

清立院の西の小坂を隔てとあり。豆州玉澤の法華寺に屬す。當寺安置の日蓮

大士の影像是、大覺大僧正の作なりといふ。諸人結縁の爲、正、五、九月の十三日内拜あり。

又毎年十月八日より十八日まで、法華經讀誦千部修行あり。

妙永山本納寺

鬼子母神の堂前、東の方の小路左の側にあり。法明寺に屬せり。當寺に九老

僧の像を安ず。九老僧は日朗上人の徒弟たり。所謂、日印、日像、日

開基して、護法堂と號す。三寶の諸尊、ならびに日月星の三光天を安ず。毎月十七日の夕より、

鬼子母神堂

雜司ヶ谷にあり。法明寺の支院大行院の持なり。本殿鬼子母神

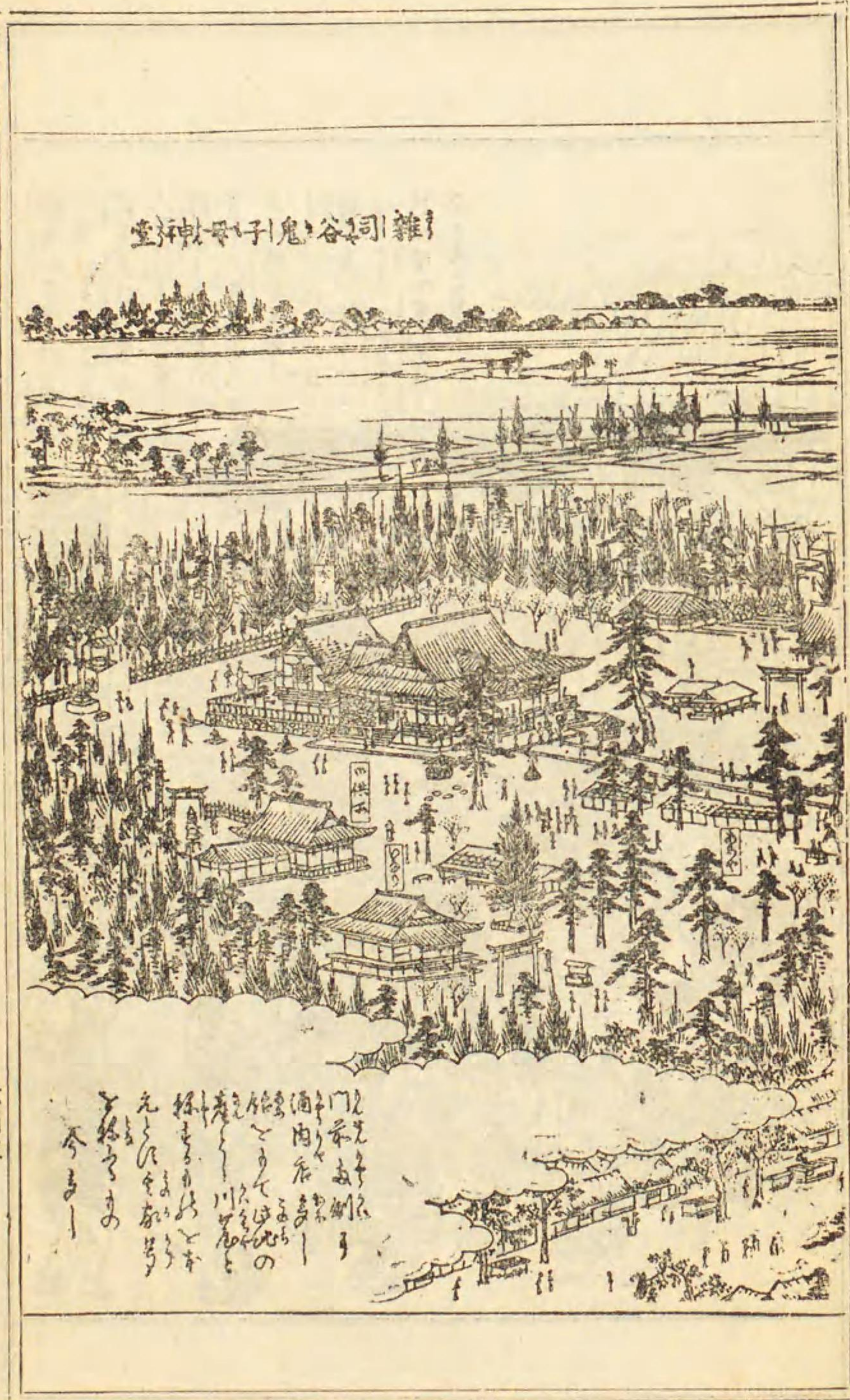
廿三日の曉に至り、三光同時に昇天の旦を待つ、終夜誦經唱題怠慢なし。是を十夜待とい

へり。

鬼子母神堂

雜司ヶ谷にあり。法明寺の支院大行院の持なり。本殿鬼子母神

名を調製帝母天(カリテ



門前
 酒肉
 雑司谷
 鬼子母
 神堂
 今より

法明寺



法明寺
 雑司谷
 鬼子母
 神堂
 其角

雜司谷の會式ハ毎年十月八日より十二日止候
仍も其法の繁々同く
此日の比より秋三日の比と
群集して物産の如
き中六名撰岡本俣
士の飾物と織物
まもは家祖と一八の
同の争と遊りゆ
りしる人一本無き
此功勞と家門の徳
示さんともや



菊箱

儀
々々
命
謀



イモラン）相殿あひでん 圓満具足天、鬼子母神の夫な
 鷲大明神さざだいまやうじん 堂前左の方にあり。祭る神祥ならず。或は云ふ、出雲國神戶郡鷲
 村の鷲浦に鎮座し給ふ。素戔嗚尊の妾女皇諸女（カウテイニヨ）な
 りといふ。此神は痘瘡の守護神にして、正徳の頃、松平羽州侯、神告に依て是を勧請す。痘瘡祈
 願の筆、廣前の小石を拾ひ侍て守護とす。例年八月朔日祭あり。また毎月朔日を以て縁日とす。 稻荷明神いなりみやうじん 堂前右の方にあり。
 大神宮とを相殿に合祭 銀杏樹いんげんぎ 社前にあり。世に 石像仁王尊せきざうにわうそん 和田戸山盛南山と云ふ寺より、自
 す。地主の神なり。 子授銀杏といふ。 證院殿こくろうつされしとなり。 華表はなうら 紫銅（カラカネ）
 の門人、日光上人の筆なりといふ。 額

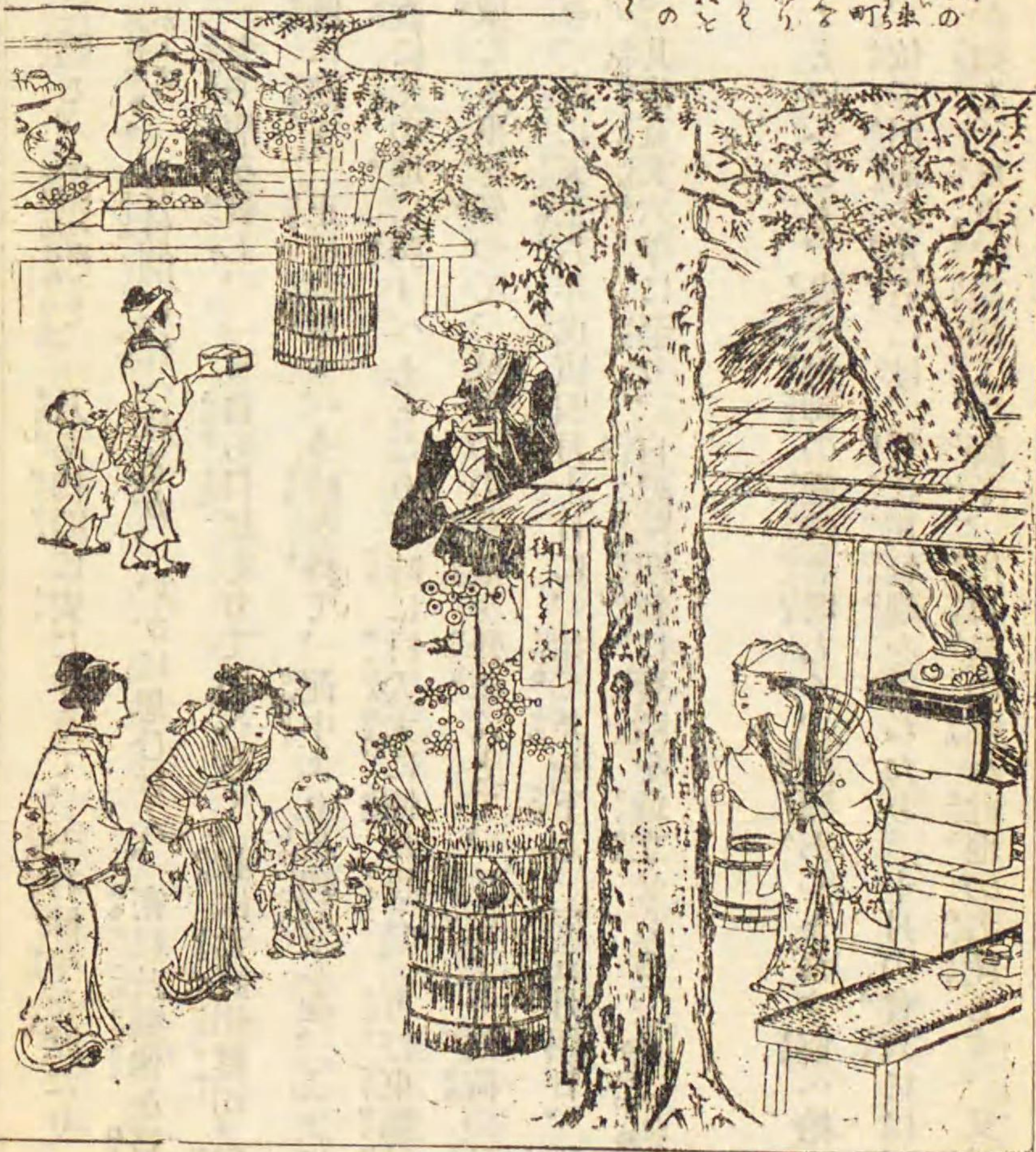
正月十五日 前夜より一山の僧徒本殿に 同十六日 辰刻一山の僧徒、本殿に集會し、法華
 集り、法華經を誦誦す。 經讀誦し終りて、祝詞酒五獻に及ぶ。 同日奉射まじや 土俗ひしやと唱ふ。
 は射手六人、各小屋より幕の中に出でて、介添の者より、弓矢と敷皮とを請取る。此間式あり。其後射手一人にて矢六筋を放つ。すべて
 三拾六筋なり。日記付、采配振、矢取り、介添等、各式あり。射手六人射終て後、一番より次第し、小屋に入る。此間一山の僧侶、又氏子の
 輩集會し、酒五獻にて終る。此式、天正文祿の頃までは記録も不束なりしかば寛永十一年、長島内匠助戸梁唯兵衛といへる人、其式を記
 して後世に傳ふとなり。此長島氏は、此所の地主にして、今大門左右に繁茂する所の楓の列樹も、此人鬼子母神へ寄進として栽えたりと
 云ふ。 同日 鬼子母神おにぼとじん 御衣習みえなひ 同十八日 萬巻陀羅 四月八日 習な 御衣 五月十八日 萬巻陀羅 六月十五日 此地の農夫集り
 拂ふ、草薙 七月十五日 御衣習にて、同十八日ま 九月十八日 萬巻陀羅 十月八日 御衣習あり。今日より十八日まで
 といふ。 追儼つゐな 當社の追儼には、男女社壇に群集し、誦經唱題す。其聲最も響し。院主以下一山の僧徒内陣に候
 近世は廿三日ま 追儼し、陀羅尼品を誦ふる事十三卷、終つて尊前の供豆を打出す。群集の男女争ひて是をひらぶ。

縁起に云く、此本尊は永祿四年辛酉五月十六日、此地山本氏、田口氏なる者、其子孫今猶 池水に
 星の現するを見て後、其地を穿ち、蹶下しりかに是を得奉りしとなり。 今護國寺の西に、其出現の舊
 跡あり、星の清水と稱す。 依

て東陽坊第五世日性師に贈る。 東陽坊は今の大 乃ち佛殿に安じするて、十有餘年を歴たり。然
 るに安房國の沙門某、其名知るべ 日性師に仕へけるが、いかに思ひけん、密に此靈像を盗み、
 故郷に歸るに、其年天正五 忽ち病を發し、一日自ら口ばしりていへらく、我は元武州雜司ヶ谷に
 あり、彼地の衆生機縁既に熟す、正に濟度すべき時を得て、泥中より出現せしを、こよに移
 す事、我意にあらず、直に元の地に歸すべしとなり。時に村人大に怖れ畏み、再び東陽坊に
 遷し奉る。仍て諸人靈威なる事を知つて、ひとつの草堂を營まんとて、往古より稻荷の社跡
 と云傳へたる叢林を闢き、竟に天正六年戊寅四月十日に、始て斧を下し、同五月朔日、經營
 落成し、こよに安置す。其後寛文六年に至り、自證院殿新に寶殿を造立せらる。 今の本殿是な
 加州黃門の息女にして、 安藝大守の令室なり。

此地は遙に都下を離るよといへども、鬼子母神の靈驗著明しく、諸願あやまたず協へ給ふが
 故に、常に詣人絶えず。依て門前の左右には、貸食店軒端を連ねたり。十月の會式には、殊
 更群集絡繹として織るが如し。風車、藥細工の獅子、川口屋の飴を此地の名産とす。又當山

此は、製す所の
 麥藁細工の角兵衛獅子は、昔高田四家町に住みし衆といへる女子製し初めたりといふ。此衆女に母一人ありしが、家貧しく、孝養心のまよならざりし事をなけき、當に雜司ヶ谷の鬼子母神へ詣し、深く此事を祈願し奉りしに、其至孝の冥慮にかなふにや有りけん、寛延二年の夏、麥わらを以て角兵衛獅子の形を造りそめたりしが、其頃雜司ヶ谷の鬼子母神、ことに參詣多かりし頃なれば、此獅子を買ふ人夥しく、竟に麥藁細工のために其身さかえければ、夫より後は心やすく母を養ふといふ。



は花の名所なり。近年境内に櫻數多植ゑて、往昔に復せしめんとす。北條家分限帳、江戸雜司ヶ谷太田新大郎所領とあり。

麥藁細工角兵衛獅子は、昔高田四家町に住みし衆といへる女子製し初めたりといふ。此衆女

に母一人ありしが、家貧しく、孝養心のまよならざりし事をなけき、當に雜司ヶ谷の鬼子母

神へ詣し、深く此事を祈願し奉りしに、其至孝の冥慮にかなふにや有りけん、寛延二年の夏、

麥わらを以て角兵衛獅子の形を造りそめたりしが、其頃雜司ヶ谷の鬼子母神、ことに參詣多

かりし頃なれば、此獅子を買ふ人夥しく、竟に麥藁細工のために其身さかえければ、夫より

後は心やすく母を養ふといふ。

百度參祈願あるもの、其社前を往返して、百度參拜す。是を俗に百度詣と號す。或人云く、此事は當社鬼子母神を以て權輿とす。其ゆゑは、十羅刹女を始とし、十人の御子にねぎたてまつる意にして、十と千との間を取り、百度詣するといへり

千圓子千足狼のたぐひ、皆此故なりとぞ。

威光山法明寺 同北の方にあり。支院八字あり。最も古刹にして、閑寂たる寺院なり。庫裡は

にて、昔のまゝなりといへり。

釋迦堂本尊釋迦多寶兩如來の像を安ず。其餘堂中に千跡佛を安ず。 銀杏樹同じ堂前にあり。往古楠女の植ゑたりし樹なりといふ。此所にあるは雌木にて、舊樹は枯れて若木なり。鬼子母神の前にあるは雄木なりといへり。

祖師堂 同釋迦堂の右に竝ぶ。中に宗祖日蓮大士の影像を安ず。立正安國論演説の跡想なりとぞ。當寺日蓮上人の手刻にして、第三祖

乙酉のとし、再び此影像の彩色を加へたりと云傳ふ。縁起に、此堂宇は弘仁九年戊戌、飛騨匠作る所。釋迦如來石像 横死の難を遁

れし報恩の爲、むかし雜司ヶ谷より板橋へ行く方の道端にありし。鯨 鐘 同所にあり。寛永二十二年甲申鑄せし所の洪鐘なり。銘文は

形を鑄附けたりしなちん歟。京師鴨川の東岸、今出川橋の南、日蓮宗法性寺にある所の鯨鐘、その模様是に同じ。

仁王門 左右に金剛密迹の像を置く。

正月元日 同三日まで坊にありて 同十三日 釋迦堂にありて千卷 二月十五日 涅槃會にて、音 四月八日 誕生會上

同日より夏の 間説法あり。 五月十三日 釋迦堂にありて千 七月七日 蟲拂 九月十三日 千卷陀羅尼 十月六日 同七日八日

同日より夏の 間説法あり。 同日 經揃(キヤウソロ)と唱へ誦經す。 此日より會式中練供養修行あり。

同十三日御影供 俗誤つてもめいこうといふ。八日より廿三日ま 塔中寺院各飾物をまうく。

相傳ふ、當寺は弘仁元年庚寅草創にして、往古は眞言宗の道場なりしに、或は云ふ慈覺大師 正嘉

元年丁巳、嚴譽律師、駿州岩本の實相寺にして、日蓮上人の法を聞き、直に宗風を轉じ、上

人の弘法にあらたむ、乃ち法號を嚴譽院日源と稱す。當寺開山是也。中老僧の一員にして、嚴秀坊といふ、

按ずるに、寺傳に當寺の山號威光と云ふを以て、東鑑に載する所の威光寺とするは大なる誤なるべし。同じ第三卷小山田の條下、谷口

弦巻川 當寺仁王門の前を東流する細き澗川をなづく。古へは布引川とも唱へけるといひ傳ふれども、共に其由縁をし

大行院 鬼子母神の別當なり。往古は東陽坊と云ふ。天正年間、加州侯の始祖前田利家朝臣

建立せられけるといへり。堂内に日蓮上人の徒弟六老僧の影像を安置す。日向、日照、日朗、日興、

改宗の頃、一昧紛失しければ、殘を當寺へ收むとぞ。小畑勘兵衛尉景憲、檀那寺なる故に、彫刻して納むる

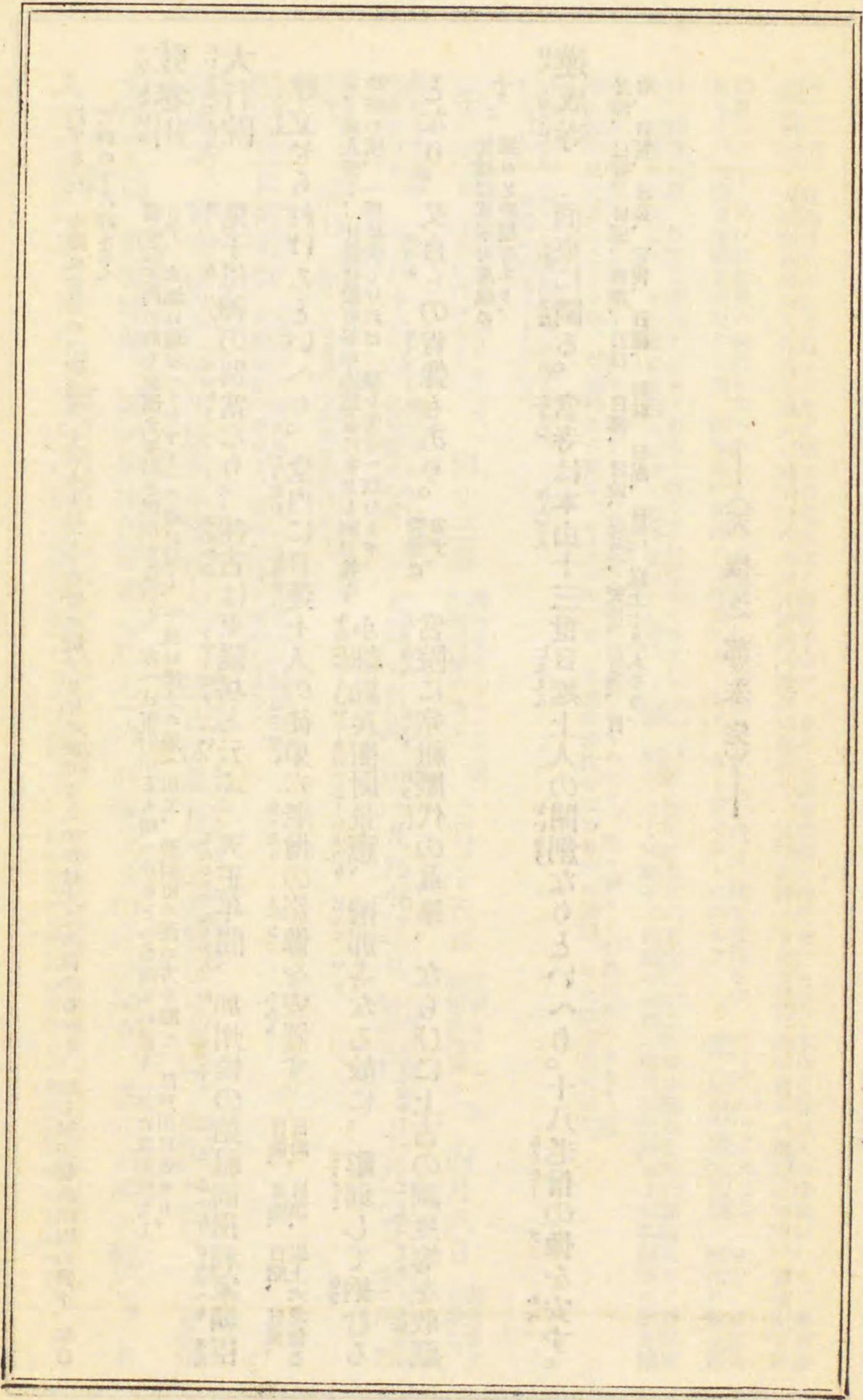
となり。又自らの肖像もあり。當院に宗祖歴代の眞筆、ならびに上古の調度等を收藏

す。其餘深草不可思議の 筆せる經題等あり。

蓮成寺 同東に隣る。當寺は本山十三世日延上人の開創なりといへり。十八老僧の像を安ず。

日源、日家、日保、日辨、日法、日傳、日位、日秀、天目、日得、日 合、日賢、日高、日實、日禮、日祐、日忍、日門、以上十八人なり。

——(天權之部 未完)——



昭和四年四月十三日 印刷發行

有朋堂文庫 (非賣品)
江戸名所圖會二卷

編輯者

塚本哲三

印刷者兼發行所

東京府下大久保町西大久保二百三十六番地
三浦捷一

印刷所

東京市神田區錦町三丁目九番地
有朋堂印刷所

發行所

東京市神田區錦町一丁目十九番地
有朋堂書店

不許複製

本草綱目

本草綱目卷之六

卷之六

卷之六

卷之六

卷之六

卷之六

卷之六

卷之六



